筆一本にて美しき繪をゑがき、（いたり）又のみ一ちやうにて見事なるほり物をほり（ほったりして）て、人を感ぜしむる（じさせるの）も手の働なり（である）。これを悉く手の働といつたらどこかに成程といひかねるふしがあることも知らせたい。結尾の「手の足らず。」といふが「働く人の少き。」を意味する修辭的のいひ方であることを知らせたい。

教　材

取る・拾ふ・握る・持つなどは皆手の働なり。もし手なくば、我等は如何に不自由ならん。箸を持つことも出來ず、帶を結ぶことも出來ず、かゆき所をかくことも出來ず、いたき所をさすることも出來ざるべし。（自分の手を見て。）

大工の家を建て、左官の壁を塗り、船頭の舟をこぎ、農夫の田畑を耕すも、皆手の働なり。又筆一本にて美しい繪をゑがき、のみ一ちやうにて見事なるほり物をほりて、人を感ぜしむるも、手の働なり。（人の手を見て。）

手はすべて仕事のもとにして、いそがしき時に、手の足らずといふは、働く人の少きをいふなり。（手が人を代表する）は一種の修辭。）

第九　炭　燒（二時間）

何處の家庭にでも、かた炭や土がまのないうちはあるまい。木がどうして炭になり、炭にかたいのとやらかいのとあるのは、何故だらうかといふ疑は、誰にもおこることだらう。人がもしおのが身邊に存在し、展開する事物に深く注意して、その眞相をきはめ、眞理を探究したら、足鄕闘を出でずとも、透徹した識見を樹立して、迷ふことなき堅實な生活を營み得るだらう。現代人は、一生に一度通過するか否かも確實でないスエズの地峽や、パナマの地峽の長さや開鑿事實を詳しく知つてゐるが、お茶の水の神田川堀割のいきさつや、堀割によつて生じた地理的變化が、いかに今日まで東京市民の生活に影響してゐるかを知つてゐる者は少い。身邊の事實に驚異の眼を見張るのは、自己を育てる第一歩であることを知らせたい。この課も太郎の研究心が、炭燒の男を師として、炭竈のつき方、炭の燒方を學んだのであ

る。これによつて「萬物すべて我が師なり。」の態度を作りたい。

第一時には全文通讀、讀み得た所をまとめて考へさせたい。―太郎が炭燒の男に教はつた、炭竈のつき方と炭のやき方を――次に第二段を書きわけさせ、

炭をやくかまを造るには、（はじめ石と土とでかまの腰だけをきづいて、天井は造らずにおく、）

其の大きさは、（大ていさしわたし八九尺、ぐらゐで、高さ五尺）

前の方には、（たて四尺四五寸、よこ一尺二三寸）のかま口を造り、

後の方には煙出の口を明ける。

設計圖のやうなものを書かせてみたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に第三段を書きわけさせ、

山の木をきり倒し、

五尺ぐらゐの長さにきりそろへ（て、―倒しての「て」はこゝへ來べきか――それを きつしりとかまの中に立て並べる。

それから（其の上にそだを中高につみかさね、又其の上にねつた土を置いて）打固めると、天井が出來る。

煙の色で燒け加減を見て、かまの外にかき出して、しめつた灰をかけてけすと、かた炭が出來上る。―て文字があると考へるがよい。

かた炭の出來る順序を考へさせたい。なほ土がま炭の作り方も考へさせたい。土の竈でやいた炭だから、土がまの名あることも序に說いたらよいと思ふ。

石炭からコークスを作ると同じやうに、生の木から木炭を作ること、蓋し昔には大なる發明だつたらう。竈のたき口、煙出しによつて、空氣の流通を知らせ、その空氣流通の不十分な結果が、蒸燒のやうになつて、炭素の消失を少くすることなども知らせたい。

教　材

太郎は毎日炭を燒く煙を遠くに見てゐるが、まだ一度も其所へ行つて見たことがない。（研究心動く。）或日炭を燒く男が太郎のうちへ來て、ゐろりのはたでいろ〳〵の

話をした。（肩やすめに里に來て。）此の時太郎が炭はどうして燒くのかときくと、其の男はていねいに教へてくれた。（求むる者には誰でも師。）

炭を燒くかまを造るには、はじめ石と土とでかまの腰だけをきづいて、天井は造らずにおく。腰といふのは、かまのまはりのことである。其の大きさは大ていさしわたし八九尺、高さ五尺ぐらゐで、前の方には、たて四尺四五寸、よこ一尺二三寸のかま口を造り、後の方には煙出の口を明ける。（かまの作り方。）

さて山の木をきり倒して、五尺ぐらゐの長さにきりそろへ、それをぎつしりとかまの中に立て並べる。それから其の上にそだを中高につみかさね、又其の上にねつた土を置いて打固めると、天井が出來る。次にかま口から火をつけて、四五日の間、中の木を燒く。さうして煙の色で燒け加減を見て、かまの外にかき出し、しめつた灰をかけてけすと、かた炭が出來上る。かまは一度造つておけば、其の後いく度も使へるのである。（炭のやき方。）

炭にはかた炭の外に土がまといふものがある。これは土ばかりで造つたかまの中で燒き、火がきえてから取出したものである。（土がまのやき方。）

第十　朝鮮人蔘（二時間）

朝鮮の藥種屋で取扱つてゐる藥品は、多く草根木皮である。その中で高價なものは人蔘だ。人蔘も產地によつて、その價が甚だしくちがふ。日本の會津地方や島根邊に出來たものは、一斤―白蔘―四五圓位、慶尙北道邊に出來る曲つた人蔘―曲蔘―は七八圓位、滿洲に出來るものは十圓內外、アメリカ產は二十圓內外と私が朝鮮にゐた頃きいた。ところが高麗人蔘―紅蔘、紅蔘とは白蔘を蒸してほし上げたるもの―は、四片一斤から、八片一斤位の優れたものになると、百六十圓位から二百五十圓位までのものがあるといふ。高麗人蔘は京畿道の開城を中心として、十二郡位の地域に出來たもので、その他でも栽培はするが、それは高麗人蔘とはいはない。紅蔘は朝鮮總督府の專賣になつてゐて、他でこれを作ることは許されない。今も山野に自生する人蔘があるが、それはさらに高價なものだ。人蔘は種を蒔い

て一年間苗を作り、それを移植するのであるが、最初の一年は葉(複葉)が一、二年は二、三年は三、四年は四、五年は五、これからは葉も殖えないし、人參の體も大きくならない。故に五年目の秋に之を收獲することになつてゐる。この植物は日光の直射をきらふ特殊の性質があるので、參圃には北方が高く、南方の低い、半間ばかりの長い屋根が幾通りも作つてある。高價な紅參の賣れるのは、主として支那の南方だときいた。とにかく支那人の間に人參の尊重せられることは、實に意想の外だといふ。

この課は朝鮮の名產として、高麗人參を說明し、その永年の栽培が殆ど信仰的でこゝに至つた事に着眼して取扱へばよい。栽培起原の童話は、この意義に於て取扱ふべきものと思ふ。

第一時には全文通讀、讀み得た所をまとめて考へさせたい。—藥用として貴重なる朝鮮人參、その栽培についての傳說—次に初から、栽培することになつたのだとつたへてゐます。」までを書かせ、表として

(貴重なもの—朝鮮人參

山野に生ずる草木の中 (藥用(貴重ならぬもの / 非藥用)

朝鮮人參の位置を考へさせたい。如何に貴重にして高價であるかは補說したい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、傍線を施した十の語句を書かせて、人參栽培の傳說を明かにしたい。なほ左記の朝鮮の普通學校國語讀本卷の八、第十朝鮮人參を參考して、補說したいと思ふ。

朝鮮人參は藥用植物なり。もと山野に自生したるものなれども、今は多く之を栽培す。朝鮮至る所多少之を產し、內地・滿洲及びアメリカ合衆國の一部にも亦之を產す。

朝鮮人參は多く南方支那に輸出す。支那人の高麗人參としてことに珍重するは、開城地方より產するものなり。

朝鮮人參を栽培するには、先づ苗床を作りて、種をまく。一年の後苗を本圃に移し、五年目の秋に收獲す。人參は日蔭を好む植物なるが故に、參圃にはすべて日覆を設く。

掘り取りたる人參を洗ひ、表皮をはぎ、日光にてほしたるを白參といひ、むしして日光と火力にてかわかしたるを紅參といふ。紅參は朝鮮總督府のみ製造し、かつその販賣を掌る。

朝鮮人參につきて面白き傳說あり。昔或婦人子なきをうれひて、神に「一子をさづけたまへ。」といのりたり。或夜の夢に、神枕べに立ちたまひ、「明日山に入りて、今我が敎ふる所へ行くべし。必ず望のものをさづけん。」と仰せられたり。婦人大いに喜び、夜の明くるをまちて、山にのぼり、敎へられたる所に至りしに、見なれぬ草に赤く美しき實のなれるあり。婦人は神のさづけたまふはこれならんと思ひ、その實を取り、歸りて畠にまけり。間もなく芽出で、次第に成長しければ、婦人は我が子の如く之を愛して育てたるに、年をへて、大なる人參出來たり。婦人はこれ全く神のたまものにして、我が一生の業とすべき事なりとて、これより人參の栽培に力をつくし、長壽をたもちて、幸福に暮したりといふ。

傳說のところは、文語文の練習としても價値があらうと思ふ。

日本でも高麗人參を高價な靈藥として、悲劇の材料に取扱つたものがある。奥州安達原などにも千代童の傷寒がなほしたさの人參代に鶴をうつところがある。我が國でも古くから靈藥と信ぜられてゐたやうである。

教　材

山野に生ずる草木の中には、藥用にするものが多くありますが、其の中貴重なものの一つは朝鮮人參です。（價意外に。たかし。）これはもと野生のものでしたが、今から千何百年も前から栽培することになつたのだとつたへてゐます。（人參の效果を信ずる事は全く信仰的だ。）さうして其の栽培については次のやうな話もあります。

昔朝鮮に一人の婦人があつて、子どもをおさづけ下さるやうに、朝晩神樣にいのつてゐました。（子なきはさみし。）すると或夜ゆめの中に、明日何山の何所へ行けば、望のものをさづけてやるといふ神樣のお告がありました。（正夢。）婦人は大いに喜んで、夜の明けるのを待つて、すぐに其の山へ上りました。（大なるのぞみをかけて。）さうして敎へられた場所へ行つて見ますと、望の赤子は居ませんでしたが、見なれない草に、眞赤

な美しい實が一つなつてゐました。婦人は、これは珍しい、神樣がおさづけ下さつたのはこれに違ひないと思つて、其の實を取つて來て、(子として。)庭先の畠の中にまきました。間もなくそれから芽が出ましたので、婦人は之を我が子のやうに育てました。(人蔘の栽培はむづかし。)これが人蔘で、此の婦人は長生をしましたが、一生の間仕合はせのよい事がつゞいたと申します。(人蔘の德によつて。)

第十一　大岡さばき（四時間）

徳川時代の名判官として、今もその名を知らないものがない大岡越前守忠相は、寶暦元年(紀元二四一一年)七十五歳を以て歿したとあるから、八代將軍吉宗の代に最も活躍した人である。正德二年伊勢山田の町奉行となり、紀伊の人と伊勢の人との訟訴を裁斷して、伊勢の人の勝とした。これが吉宗に見込まれるもとである。吉宗八代の將軍となるや、忠相を召し出して、江戸の普請奉行とし、その翌年町奉行として、元文元年(紀元二三九六年)寺社奉行とした。その裁斷、檢擧の名高いものは、大岡政談として天下に傳はつてゐるが、その中裁斷から子ども爭、檢擧から石地藏が選擇してある。子ども爭については、一時世に是非の論が高かつたが、よく讀み味はうてみると、道を逸した事は、いかに爭つても、かくしても、爭ひ難く、かくし難き一點存する事がわかる。それを悟らせるのがこの課の眼目であるから、是非の論點は、多少編者の考とは違つてゐるかと思ふ。私は常に考へてゐる、「教材は必ずしも完全無缺のものでなくてもよい。」と。善は惡によつてその義明かに、惡は善によつてその意が鮮かになる。まして善といひ、惡といふも、一つの心の明暗二面で、善を行ひ、惡を行ふのも、その場の事情因緣が然らしめる事が多い。かやうに考へて來ると、この教材からは生みの親と里親との愛に差異あることを知らせようとしないで、なさぬ中ならば、なほさら自己にふりかへつて、「よくもこれだけにお世話下さる。」と感謝し、うまぬ不幸の身にも、かく愛兒を與へらるゝ有難さを感謝したら、世にあり勝のなさぬ中の問題は一掃さるゝことと思ふ。この材料を難する心では、到底拔苦與樂の境地に人の子を導くことは出來ない。

一　子ども爭（二時間）

私はこの材料を通讀して、大岡樣にも似合はないと思ふふしがある。それは生みの母に對して、一言のおしかりもない事だ。私が町奉行だつたら、この生みの母をうんととつちめてやる。夫が死んだために、乳飲子を里に出して、母が奉公に出るといふことは、世間にいくらもあるならひだ。そこで月々の養育料や、盆暮れのつけとどけを缺かなかつたら、あづかつたおぼえがあるもないもある譯がない。さつするにその仕送りの途が絶えたがために、里流れの子として、里親は育ててゐるうちに、かはいさがまさつてほしくなり、預つたおぼえがない。」と虚言をかまへたのであらう。虚言するのは不屆至極としても、その情狀酌量すべきものがある。判官は理非を斷するのみが任ではない。いかにもと納得のいくやうに裁斷するのが、名判官といふものだ。現代の裁判にも、このうまみが缺けてゐる場合があるのではあるまいか。

閑話休題、里親が實母だといひ張つたのは、道を逸してゐる。里親では實母のまねの出來ない所がある。そこの人情の機微をつかんで、裁斷の原據を得たのは、さすがに大岡樣である。しかしこれでは里親の虫がをさまるまい。養育料の請求では實母がぐつとまゐるだらう。この教材は十一の卷第六課裁判の民事につゞくものとして、取扱つておくことが大切だ。

第一時には一子ども爭の全文通讀、讀み得た所をまとめて考へさせたい。—實母も里親もこの一人の子どもがほしい。越前守は母の愛を裁斷の原據として、子の引張合をさせた。里親には爭はれない點がある等—傍線を施した十二の語句を書かせて、子を爭ふに至つたいきさつを考へさせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習を終へたら、對話全部を書かせ、「かしこまりました。」といふに、引割いても自分が勝つてみせるといふ決心を考へさせ、話を判決に進めたいと思ふ。裁判沙汰は被告にばかり罪があるのではない。この子供あらそひなども、原告の手落がこの訟訴沙汰に及んだことを知らせたい。

二　石地藏（三時間）

石地藏は犯人の檢擧に越前守が奇才を弄した一例である。物を盗む者は、品物を金にかへて、世の中を太く短く暮さうといふのである。今日のやうに交通の便利な時には、贓品の運搬も自由だが、五十反の木綿を背負つてはこぶには、容易なことではない。とにかく江戸の市中で始末しなければならぬ。そこに越前守は目をつけたが、廣い江戸に木綿五十反、多くの人と廣い場所から、木綿をとつてみる要がある。そこで地藏樣をしばつて、多くの人の好奇心をそゝり、物見高い人々を町奉行所の廣庭につれこんで、それから木綿を壹反つゞ出させた。檢擧の補助として、四五百の町民を參加させた譯である。その着眼が奇拔で、而も要領を得てゐる。これもまた人情の機微に立脚して、檢擧の實をあげたものである。越前守のこの奇智は驚歎の外はないが、町奉行としては、石地藏の前にひるねをする手代をなくすることが大事だ。天下の政道といふのはそこにあるだらう。

第一時には石地藏の全文通讀、讀み得たところをまとめて考へさせたい。―呉服屋の手代が白木綿五十反を盗まれた。五十反は遠くへ散つてはゐない。なるべく多人數から木綿を取寄せて見る要がある。そこで地藏捕縛の珍案を考へた。そのはかりごとが圖にあたつて、犯人をとらへ得た等―次に傍線を施した十三の語句を書かせて、越前守の苦心のあとを考へさせたい。人はよく生きんとするために働くものである。盗するのも亦物的によく生きんとするためだらう。そこに眼をつけたら、いかにかくさうとしても、世にかくしおほせることはない。今も檢擧の着眼はこゝにあるらしく罪惡のあらはれないで終つたといふ例はない。それらもあはせて考へさせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に對話全部を書かせて、その上に越前守の心の動きを明かに認めさせたい。なほ呉服屋の手代も十分にいましむべき必要のあることを知らせたい。

教　材

一　子ども爭

昔江戸で、夫に死なれた女が、乳飲子を里子にやつて奉公に出ました。（世にあるならひ。）幾年かの後、里子を返してもらはうとすると、（うちやつておいたのか。）先方はあづかつたおぼえがないといつて返しません。（人の子でも育てるとかはいい。）困つて町奉行へ訴へて出まし

た。（民事訴訟）

時の町奉行は名高い大岡越前守で、一人の子どもに二人の實母はないはずといつて、（とぼけた事をまじめらしく。）いろいろ調べますが、どちらも實母だといひはります。（かはいくてほしいものと、かはいくてほしいものと。）越前守はじつと考へましたが、

「其の子を二人の眞中に置いて、兩方から子どもの手を取つて引合へ。勝つた方へ其の子を渡す。」（利を以つて、人情の機微を見んとす。）

といひました。二人の女は

「かしこまりました。」（越前守ともあらう方に、しかも白洲でこの裏表があらうとは誰か知らう。）

と、兩方から引合ひました。（まるでかしわの料理だ。）が、子どもがいたがつてわつと泣出しますと、（もつとも）實母の方は驚いて手を放しました。（爭はれぬは母子の情。）里親の方は「それ見よ」。といはぬばかりに、子どもを引きよせますと、（してやられた。）越前守は聲をかけて、

「これ女、其の手を放せ。泣くのもかまはず力まかせに引くとは、情を知らぬ不

屈者。（これは道理だ。）手を放した女が實母にきまつた。」（大岡様、實母にも何とか一言おつしやい。）

と申し渡しましたので、里親は恐れ入つたといひます。

二　石地藏

呉服屋の手代が、大きなふろしきづつみを石地藏の前におろして休みましたが、餘程つかれてゐたものと見えて、何時の間にかぐつすりねこんでしまひました。（不心得なもののために、世の中にはとかく厄介事が出來る。）

目をさまして見ると、ふろしきづつみがありません。（今も公園のロハ臺に自轉車をもたせかけて、ひるねしてゐる小僧がある。）

包の中には白木綿が五十反ばかりはいつてゐたのでございます。驚いてあたりをさがしても見當らず、近所の人にきいても知らぬ知らぬと申します。困つて町奉行へ訴へて出ました。（自分の眠つたともいつたか。）

越前守は手代の言ふ所を聞いて、

「其の方の申す所では、どうやら其の地藏がうたがはしい。（迷惑。）（とんだ御ぎんみをしよう。（世間の者をなめてゐる。）」

召しとつて

といつて、下役の者に石地藏をしばつて來るやうに命じました。（大きな芝居だ。）下役の者が石地藏に荒縄を掛けて、車に積んで參ります。（珍檢舉。）物見高いは江戸のくせで、

「何だ、何だ。」（氣の早い者。）

「地藏樣が縄にかゝつていらつしやる。」（馬鹿々々しい。）

「これは珍しい。地藏樣でも惡いことをなさつたと見える。」（痛快に笑ふ。）

などといつて、四五百人のものが、ぞろ〳〵と車の後について、（眞面目な事とは思はれず。）思はず知らず役所の門内へ入りこみました。（天下の決斷所を何と心得てゐる。）

越前守は早速門をしめさせて、（思ふっぽ。）見物人一同の所名前を書取らせ、さておごそかに、

「此所は天下の役所なるに、許しもなくて亂入する（亂入するとはあまりだ。）とは不屆しごく。もはや歸すことは相成らぬ。」（亂入させた者がある。）

と申し渡しました。一同は驚いて、泣くやらなげくやら、（お上とはいへ、我がまゝの申條だ。）大さわぎでございます。しばらくして、其の中のおも立つた者が出て、いろ〳〵おわびを致します（泣く子と地頭。）と、越前守は

「しからば許してつかはすであらうが、（策士だ。）其の代りと致して、白木綿を一反づつ、（白木綿がいるならいるとおつしやい。）名札をつけて、三日の間に間違なく持參致せ。」（おどかすものではない。）

と命じました。

三日の間に一同は白木綿を一反づつ持つて參りました。（深意のあるところを知らず。）越前守は呉服屋の手代を呼出して、其の中に盗まれた品のありなしを調べさせました。すると其の中に二反ありました。（手がかりが出來た。）そこで其の反物を出した者を呼出して、買先をたゞし、それからそれと調べましたので、とうとう罪人がわかりました。（呉服屋の手代は優遇されてゐる。）

越前守は再び一同を呼出して、さきに納めさせた白木綿を返し、（檢舉の手傳役。）ついでに石地藏を、もとの所へもどしたと申します。（これも衆生濟度のため。）

第十二　手　紙（二時間）

この課は手紙二つから出來てをる。一は小ぞうから主人へ、二は主人から小ぞうへといふのである。こゝに小ぞうといひ、主人といふ。一は雇人で、一は被雇人である。二つにわけて見ると、たしかに別物に見えるが、一つの業務に共に從事してゐるといふ見方からは一は大店員で、一は小店員である。主人ばかりでも商賣は出來ず、小ぞうばかりでも商賣は出來ない。二者が一心同體のやうに働く時、最も能率の高い商賣が出來るのである。主人・小ぞう共に一つの道にたつて進めば、いかなる事件に遭遇しても、感謝の生活を送ることが出來るが、道を自分以外の理に求めようとする時、自ら作つた理窟で自ら悶えるやうなことになる。この手紙は、それらの事を取扱ふのに、最もよい資料を提供してゐる。

一　小ぞうから主人へ（一時間）

手紙の要件は、さらに四五日のおひまを願ひたひといふのである。その理由は、祖母の容態が今しばらく手ばなし難いからである。その他は前文と感謝である。この手紙を讀み味はうと、缺勤してゐることが、いかに祖母の病氣で止を得ぬとはいへ、相濟まぬといふ心持の強いことがあり〳〵と見える。はじめに「取分けおいそがしい中を。」といひ、「まことに勝手がましい御願でございますが。」といふ。全くよい感じがする。人は理に生きる時冷たさを感じ、情に生きる時暖みを覺える。雇傭關係の理からおして、四五日の追加缺勤を願つたら、事は同じ所に落着しても、のこる感じが天地の差であらう。かういふ心持の淺吉君に對してこそ、店の人々も助け甲斐あるおもひで、淺吉君の事務を代理することになる。この頃のやうに、權利義務で一切を處理していかうとして、主人と小ぞうの間が極度に氣まづくなつて來ると、迂遠と見てゐた舊時代の雇傭關係が、すぐれてうつくしいものである事をはじめてさとるであらう。

まづ一小ぞうから主人への全文通讀、書いてある事柄をまとめて考へさせたい。

―前文、感謝、祖母の容態、要件―全文書かせて、まづ要件をたしかめ、その理由、次に感謝、ことに祖母の喜を考へさせたい。次に小ぞうの美しい心持を、「取分けおいそが

しい中を。」と「まことに勝手がましい御願でございますが。」に見させたい。一家の業務に對して、大店員と小店員が、共に流るゝ心持であたることが、最も能率の高いことなどをも附說したい。

二　主人から小ぞうへ（一時間）

小店員から前の手紙を得て、大店員なる主人が、何でぐづ〳〵いはれよう。快く之を許することは當然だ。主人はさすがに主人だ。小店員の身にふりかゝる難儀を、よそには見てゐなかつた。なほ祖母一人孫一人のことだからとは、何といふ心にしみる言葉だらう。要するにたより少き身であるに同情して、五日でも十日でもと許した所は見上げたものだ。士はおのれを知る人のために死すといふが、士でなくても、人生は意氣で動くものだ。物に乏しい小ぞうを氣遣つての見舞の爲替、小ぞうはいかに感謝し安心しただらう。

まづ二主人から小ぞうへの全文通讀、小ぞうの願ひ出た要件はどうなつたか、それを確かめたい。……許された。たより少い身だからといふ理由――次に全文書かせて、要件理由をたしかめ、そこに主人のあたゝかき心持をうかがはせたい。主人が淺吉の心配を自分の心配として、見舞の金ををしまぬそのもとは、やはり淺吉の平素のつとめぶりがよいためであることを知らせたい。雇傭關係の日ましにすさみ　く今日の教材として、實に尊いものと思ふ。

教材

一　小ぞうから主人へ

「謹んで申上げます。（前文）取分けおいそがしい中を、一週間もおひまをいただきまして、まことにありがたう存じます。病中の祖母も大さう喜びまして、ありがた涙をこぼして居ります。（一家の感謝。）始は熱が高くて心配致しましたが、昨朝あたりから熱が下つて、食事も進むやうになりましたので、やつと安心しました。しかし醫者の申す所では、老體のこと故、餘程大事にしなければならないとのことでございます。（容態）まことに勝手がましい御願でございますが、もう四五日の所おひまを願ひたうございます。（要件）

十二月十四日　　淺吉

御主人様

二　主人から小ぞうへ

其の後どうかと案じてゐましたが、手紙を見て安心しました。（堵。先安）こちらの方はどうでもなるから心配するには及びません。（要件。）祖母一人孫一人の事だから五日でも十日でも、一人で寢起の出來るまで、ゆつくり看病してお上げなさい。（あたいか理由。）此の爲替はほんのわづかですが、何か好きな物を買つて上げて下さい。（見舞のし。るし）

十二月十六日　　村尾甲藏

淺吉殿

第十三　鷲（二時間）

我が國に於ける鳥類の王である鷲の、強さとやさしさを書いたのがこの課である。――第一段が強さで、第二段がやさしさである――私はこの課の取扱を福岡縣の二日市で望まれて、よく〳〵讀んでみた。第一段に強さの書いてあることはすぐにわかつたが、第二段がやさしさであることは、第一日にはどうしてもわからなかつた。教師にかうした着眼の不安があると、兒童の興は乘つて來ぬ。二日二時間で取扱ふ第一時間を、酸ともアルカリともつかぬ教授をした時の不快は、到底口にはいへない。他が何といはうが、見ようが、それは問題ではないが、内の教授良心が許さぬ。歸つて溫泉に浸つて考へたが、よい考が浮ばない。氣を腐らせて寢た。翌朝未明に起き出て、溫泉に浸りながら、昨日の失敗のあとと、今日の難關を思つて、ぼちや〳〵やつてゐた。湯から出て、室に歸つて、東の障子をからりとあけて、晩秋の朝日にむかつた。さうして八の卷の鷲を讀んだ。第一段は鷲の強さで、昨日と少しもかはりはないが、第二段は全くちがつて讀めた。それは鷲のやさしみが書いてあると氣がついたのであつた。うれしい、無上にうれしい。一語もやさしいといふ事は書いてないが、巢を作つて、卵をうんで、雛を育てるといふ事が、どんな強い者にでも、猛しい者にでも、ある優しい一面ではあるまいか。かう思ひつくと、第

十三の全文字が活躍して見えて來た。卽ち第一段の强さが、第二段のやさしさによつて、潤ある强さを感じるやうになつた。大船に乘つたやうな感じだ。朝食を終つて、學校へ急いだ。尋四の教壇に立つて、まづ兒童に語つたのは、昨日の不安と今日の着眼とであつた。兒童は笑を以てむかへてくれた。我は戰はざるに既に勝ち得た感じであつた。

第一時には全文通讀、何が書いてあるかをきいてみたい。—第一段は鷲のつよみ、第二段は鷲のやさしみなど—次に

大キサカライツテモ、強サカライツテモ、（鷲ハタシカニ鳥類ノ王デアル。）

怒ツテキル肩、

サキノ曲ツタ大キナクチバシ、

スルドクテ落着イテキル目、

トガツテカギノ如クニ見エル爪、（何所ニ一分ノスキモナク、強ミガ全身ニミチミチテキル。）

コゲ茶色ノ羽、

アクマデモガンジョウナ（ツバサ、尾、）

と書かせて、かうした複雜な文を讀む場合の注意を知らせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に傍線を施した十四の語句を書かせ、自由の天地を自在にかける勇壯なる鷲、—不幸私は一回も之を見たことなし—獲物を發見した鷲を、文を通して考へさせたい。第二段の鷲のやさしみは、最後の板書から取扱つて、家畜ヲサラフ鷲は、人間を敵としての行動だから、鷲にとつて最も危險であること。次にヒナヲ育テル間ハ最モ氣ガ荒イのは、雛のかはいさから。春ノ初ニ二三ノ卵ヲ產ミ、五週間程アタタメテヒナニカヘスその苦勞なども、母としてのやさしみから。絶壁ノ間や老木ノ上に巢ヲ作ルのも、皆鷲のやさしい一面であることを知らせたい。猛きものにもこのやさしい一面があるために、はじめて生物としてのまるみが出て來ると思ふ。それらも考へさせたい。

教材

大キサカライツテモ、强サカライツテモ、鷲ハタシカニ鳥類ノ王デアル。金アミ

ノ中ニ飼ハレテ、ジツト止リ木ニ止ツテキルノヲ見テモ、怒ツテキル肩、サキノ曲ツタ大キナクチバシ、スルドクテ落着イテキル目、トガツテカギノ如クニ見エル爪コゲ茶色ノ羽、アクマデモガンジョウナツバサ・尾、何所ニ一分ノスキモナク、強ミガ全身ニミチミチテキル。（雄々。委堂）マシテ自由ノ天地ニ居テ自在ニ空ヲトブ様ハ、實ニ勇マシイモノデアル。（まだ一度も見たことがない。）スナハチ一間餘モアルツバサヲハツテ、數分ノ間羽バタキ一ツセズ、空中ヲノシテ行ク。サウシテ何カ地上ニエモノヲ發見スルトスウット下リテ來テ、急ニツバサヲチヾメ、風ヲ切ツテマツシグラニエモノノ上ニツカミカヽル。狐・狸・兎・犬・豚ナドハ彼ノ求メル物デアルガ、マレニハ庭先ニ遊ンデキル子ドモヲサラツテ行クコトモアル。（生肉をたしむ猛禽の特色。）鷲ハ遠ク人里ヲハナレテ深山ニスム。巣ハ至ツテソマツナモノデ、人ノヨリツケナイ絶壁ノ間ヤ老木ノ上ニ、タテ横ニ小枝ヲ並ベ、其ノ上ニヤハラカナコケヲ置クダケデアル。春ノ初ニ二三ノ卵ヲ產ミ、五週間程アタヽメテ、ヒナニカヘス。ヒナヲ育テル間ハ最モ氣ガ荒クテ家畜ヲサラフノモ多クハ此ノ時デアル。（やさしい一面）

第十四　餅つき（二時間）

十二月の半過ぎると、煤掃をし、暮ちかくなると、餅をつく。餅をつくと、家の中はいよ〳〵正月の近づいた感じになる。餅つきは一家總動員で事にあたるので、一家の中は全く生々した氣持になる。庭の大竈に火をたくので、家のうちは明るくて暖い。この一行事が、いかに一家の人々を清く、明るく、なつかしい心持にするかは、殆ど意想の外だらう。餅つきが教材としての價値はそこにあるので、之を取扱ふにも、そこに着眼しなければならぬ。

第一時には全文通讀、讀み得た所をまとめて考へさせたい。――ねてゐたものはこの文の作者だけ。他の人々は小一時間も前から起きて火をたき、米をむし、臼場をつくり、餅をのしたり、まはしたりする所を作つてゐたのだ。準備がとゝのつて、いよ〳〵つきはじめて、一臼、二臼、三臼、四臼と進んでいくにつれて、おそなへが出來たりのしもちが出來たりする。兄さんの一臼はことに意義がふかい。八時すぎにすつかりすんで、最後の一臼にあづきやきな粉をつけて、自分のうちでも食べ、近

所へも配つたといふ所に、なつかしむ心があふれてゐる―次に傍線を施した十の語句を書かせ、餅つきの概觀をたしかにさせたい。

二かさね目のせいろうは、よく何處でも質問をうける。餅つきの時のせいろうは、四つ或は五つ重ねてあるが、どれにも糯が一臼ぶりだけ入れて蒸してある。一番上のせいろうから蒸氣の出る樣子によつて、一番下の糯の蒸せ加減を推測し、それからつきはじめるのである。空になつたせいろうには、また糯を入れて、一番上におく。さうして順繰りに二臼、三臼、四臼とついて行くと、一かはり目の最後のせいろうをつく時には、二かはり目の四つのせいろうはまだ蒸しがあがつてゐない。そこに少し時間の餘裕がある譯である。その時間に兄さんがついたのである。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に「二かさね目のせいろうから。」より「一臼だけはつき上げた。」まで全文かゝせて、總領が餅をつくといふことは、一家に一人前の人手が一人ふえたといふ意義にもなる。

「私にもつかせてみて下さい。」

「とてもまだ。」

「まあ、ついてみるがよい。」

この各のことばに深い意義のこもつてゐる事を考へさせたい。――自分の力をあやぶみながら「つかせてみて下さい。」と切つて出たのは、兄さんの一つの進出で、それをあやぶんだのがおぢいさん。おばあさんは孫の意志が通してやりたさの仲裁。父と母はたゞ笑つて、事の成行を見てゐる。その中で兄さんは杵にもてあそばれながら一臼だけはやう〳〵つきあげたのである―兄さんの一臼を中心に、一家の人々の思をまとめて、そこに餅つきの眞精神のあることを知らせたい。年の暮ちかくなつて、全國餅をついて同じ氣分になり、お正月を迎へるといふは、我が國の美しい仕來りである。

教　材

餅をつく音に目がさめた。（威勢のよいきな音だ。）はね起きて見ると、土間の大釜の上に積んであるせいろうからは、盛にゆげが上つてゐた。（白い煙のやうに高く上つて行く。）

おかあさんは取粉をのし板の上にひろげて、餅のつき上るのを待つていらつし

やる。おとうさんはきねおばあさんはこねどり。（氣合がよくあふ。）おぢいさんは大釜の火をたいていらつしやる。（顔がほてつてにこ〳〵。）にいさんが奥の間に、餅を並べる所をこしらへてゐた。（一家總動員。）

「お早う。」

といふと、

「よく目がさめたね。今四時を打つたばかりだ。」（まだ〳〵らい。）

と、にいさんがいつた。

つき上ると、おばあさんが餅を臼の中で丸めて、おかあさんの所へ持つていらつしやつた。（熱いとみえる。）おかあさんはそれを二つにちぎつて、ぐるぐるまはしていらつしやつたが、忽ちきれいなおそなへになつた。（餅はうつくしい姿だ。）

二臼目で小さなおそなへ（神々様への。）が幾かさねか出來、三臼目からは、のし餅が出來た。四臼目の時は、おぢいさんも手つだつてつかれた。（お父さんの手助け。）

二かさね目のせいろうからゆげが上るまでに、少し間があつた。其の時にいさんが

「私にもつかせてみて下さい。」（自信はない。）

といひ出すと、おぢいさんが

「とてもまだ。」（おぢいさんにも骨がをれる）

とおつしやつたが、おばあさんは

「まあ、ついてみるがよい。」（つかせてみたい。）

とおつしやつた。

いよ〳〵にいさんがつき出した。始のうちは勢がよかつたが、（小づきの間。）間もなく腰がふらつき出して、（杵が人を左右す。）ふみしめてゐる兩足が、きねをふり上げるたびに動いた。（こねどりのおばあさんがあぶない。）おとうさんが

「せいは高くても、まだだめだ。」（鼻の孔が足りまい。）

とおつしやつたが、それでもとう〳〵一臼だけはつき上げた。（兄さんは意地つぱりだ。）

八時頃には、すつかりすんだ。おしまひの一臼には、小豆やきな粉をつけて、うち

でもたべ、近所へも配つた。（美しい心。）

第十五　町の辻（二時間）

もし神をこの町の辻に伴ひ來つても、このこぞう以上の行動をなさることは出來まい。もし佛をこの町の辻におつれ申しても、このこぞう以上の救の御手はおかしにならぬだらう。町の辻に於けるこの小ぞうは、そのまま神にして、また佛だ。幾多の紳士淑女もその前を往來してゐるのだが、悲しやこの老婆が見えぬ。目の見えぬ人には罪もない。心の光は神佛に通ふ。その光を自ら見つけて、その光の照すがまゝに動いたら、たちまちにして地上の天國がそこに現出するのである。この韻文を、單に事實とのみ見ないで、心の光の輝き出でたるものとして、讀みかつ取扱へば、全文字活躍して、よい感じに浸ることが出來るだらう。

第一時には全文通讀、讀み得た所について、次のやうなことを問うてみたい。

一、この歌の中に美しく光つてゐる人―米屋の小ぞう

二、その光によつて救はれた人―老婆と道行く人の一部と下駄屋の店にある人々

三、尊い光を持ちながら、それを見る目のない人―行きかふ男女

次に第一節第二節第三節を書かせ、それによつてその場面を想像させ、特に老婆、行きかふ人、米屋の小ぞうについて考へさせたい、主としてその心について。―老婆は、他の美しい心の光に照らされなければ、ほろび行く人。行きかふ男女は、心の光を自ら覆つてゐる人。米屋の小ぞうは、心の光の示すままに動く人。

第二時にも全文通讀、第一時の復習、次に第四節第五節を書かせて、小ぞうの心事―母を見る目で、老婆を見た。そこに心の光が美しくかゞやき出でたのである。道行く人の一部は、その光に照らされて、「年の若きに感心な。」とほめた。心の光は老若男女にはかゝはらない。さらにその光は下駄屋の店の人々を照らした。さうして小さき悔をいだかせた。なほ美しい心の光、神にも佛にも通ふ心の光は、誰にも與へられてゐる事を知らせたい。

教材

雪どけ道のぬかるみを
杖にすがりてとぼ〳〵と、
歩み來れる老婆あり。（世にも不幸なる人。）
ゆききの車馬のたえざれば、
向ふの側へ行きかねつ。（しかし越さねばならぬ。）
老婆の前を右左、
行きかふ男女多けれど、（心なき人には目もなし。）
北風寒き町の辻、
身なりいやしき老婆には、
手をかす人もあらざりき。（目のない人には惡事でもない。）
米屋の小ぞうお得意へ
米を運びし歸り途、（目の見える人唯一人。）
ひらりと下りて自轉車を

角の下駄屋にあづけ置き、
すぐに老婆をみちびきぬ。（止むに止まれぬ心のわざ。）
「年の若きに感心な。」
かくいふ聲を後にして、（いまはいふに。）
小ぞうは乘りぬ、自轉車に。
國に母をや殘すらん、
彼のまぶたにつゆありき。（母を見る目で人を見る。）
下駄買ふ人も、賣る人も、
下駄屋にありし人は皆、
彼の姿を見送りぬ、（美しき心の光にてらされて。）
さとすべき子にさとされし
小さき悔をいだきつゝ。（見えぬ我が目をかこちつゝ。）

第十六　看　板（二時間）

市街地の商業をいとなむ家、工業をいとなむ家には、大抵看板を出してゐる。看板は家の目じるしで、また廣告の一法である。商人にしても、職人にしても、これに工夫をこらすのは當然である。即ち看板の如何によつて家業の盛衰に影響を生ずるのである。かく人々の生活に深い關係を持つてゐる看板を、兒童に注意研究させることは、身邊から自己を育てる資料を蒐集する意義の深いことである。市街地の兒童は、その町の看板の寫しをまづ蒐集し、分類して、人の注意をひかうとするについての工夫を考へさせるがよい。村落の兒童は、「私の見た看板」として、見たものの寫しを蒐集し、研究させるがよい。こゝに着眼して取扱へば、この課の多くの名詞は、悉く強き生命のあらはれたものとして、趣味を感じることが出來ると思ふ。

第一時には全文通讀、次に各段の大意を考へさせたい。―第一段は看板の目的。第二段は看板を掲げる場所。第三段は文字による風がはりの看板。第四段は看板に繪及び模型をつかつたもの。第五段は宿屋の掛行燈、芝居活動の繪看板、寫眞屋の實物看板等風がはりの看板。しかし全部目印として、かつ廣告として有效なやうにとの意は、どれにも見られる―傍線を施した十の語句を書かせ、看板をかゝぐる意義、看板をかゞぐる場所の變化―大屋根にかゝげたるもあり―風がはりの看板等について考へさせたい。私は燒藷屋の看板に「十三里」と書いたのを見たことがある。これは栗以上の義で、九里四里といふのださうだ。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に

看板
- 商品ヲエガキタルモノ
  - 洋物屋―シャツ・襟・襟飾
  - 金物屋―鍋・釜・庖丁
- 商品ヲ大キクセル模型ヲカヽグル風―足袋屋・蠟燭屋・時計屋・扇屋・櫛屋

此ノ他
- 宿屋ニハ掛行燈ニ旅人宿何屋ト記シテ掛クルモアリ
- 芝居又ハ活動寫眞ナドノ興行場ニハ繪看板アリ、
- 寫眞屋ニハ寫眞ノ看板モアリ

テ、看板の種類ハキハメテ多シ。

を書かせて、特殊の看板について考へさせたい。看板の書方、字體等も趣味の推移によつて、變化あることを附說したい。看板を研究するには、

一　場所について―軒下に、小屋根に、その他

二　看板に用ひる物について―文字、繪畫、模型、實物

三　看板として見らるゝ商店の陳列―かざり窓

四　電氣利用の看板

など類別して觀察し、寫しの蒐集をさせるがよい。

教材

學校用具ヲ賣ル店ニ、手帳・筆・墨・繪具ナドト記シタル看板ヲ出シ、ハキ物屋ニ下駄・草履・傘ナドト、大字ニテ目立ツヤウニ記シタル看板ヲ出セルハ、ヨク人ノ知ル所ナルベシ。スベテ看板ハ商品又ハ職業ノ名、屋號等ヲ記シテ、人目ニツキヤスカラシメントスルモノナリ。（商略の一。）

近年人々ノ生活次第ニイソガシクナリテ、見物人ノ外ハ、町ノ兩側ヲナガメテ、ユル〳〵歩クガ如キ者ナシ。ヨリテ看板ノ如キモ、々ヤスク人目ヲヒカシメンガ爲ニ、キソヒテ小屋根ノ上ニカヽグルニ至レリ。（看板をかゝぐる場所もかはつていく。）

サレド食物ヲ賣ル店ニハ、今ナホ古風ヲ守リテ、生そば（キソバ）・うどん（ウドン）・まるまし（シルコ）・寿し（スシ）・せんべい（センベイ）ナドト記シテ、軒ニ下ゲタルモアリ。（世がすべてかはれば、かはらないのも一つの工夫である。）又マレニハナゾヲ用フルモアリ。彼ノ燒藷屋ノ看板ニ、八里半ト記セルモノノ如キハコレニシテ、其ノ味クリニ近シトイフ意ナリ。（文字によるもの。）

看板ニハマタ商品ヲエガキタルモノアリ。洋物屋ノ看板ニ、シャツ・襟・襟飾ノ類ヲエガキ、金物屋ノ看板ニ、鍋・釜・庖丁ヲエガクノ類ナリ。又足袋屋・蠟燭屋・時計屋・扇屋・櫛屋等ニハ、商品ヲ大キクセル模型ヲカヽグル風アリ。（繪畫模型によるもの。）

此ノ他宿屋ニハ、掛行燈ニ旅人宿何屋ト記シテ掛クルモアリ、芝居又ハ活動寫眞ナドノ興行場ニハ、繪看板アリ、寫眞屋ニハ、寫眞ノ看板モアリテ、看板ノ種類ハキハメテ多シ。（特殊のもの。）

第十七　塙保己一（二時間）

塙保己一は武藏國兒玉郡保己野村の生れで、父は荻野宇兵衞といつて、心がけのよい百姓であつた。塙の姓をなのつたのは、師匠雨富檢校須賀一の本姓をついだのである。

延享三年（紀元二四〇六年德川九代將軍家重の始頃）にうまる。

三つの年、肝をわづらつて、五歲で失明した。

十二の年に、母にわかれた。

十五の年に、父の許を得て、春三月江戸へ出で、雨富檢校の門にはいつた。この師匠の情で、學に志すやうになつた。

二十四の年に、賀茂眞淵について敎をうけた。

三十の年（安永四年正月元日）、勾當に進んで、塙保己一となのる事になつた。

三十四の年、麴町土手四番町で溫古堂を開き講義をはじめた。

四十八の年（寬政五年）、和學講談所をたてた。

七十五の年、群書類從六百七十卷が出版された。思ひたつてから四十一年目。

七十七の年（文政五年）七月九日になくなつた。

南洋群島國語讀本、補習科用卷一の十三塙保己一といふ文を左に掲げて、參考に供しよう。

日本に名高い學者も多くありますが、その中で塙保己一わもつともめづらしい人です。

保己一わ五歲の時、病のためにめくらとなりました。父も母も手をつくして治療しましたが、全くそのかいがありません。保己一が十二歲の時、母がなくなりました。めくらの子が母をうしなつたみじめさわ、一通でわありませんでした。

子供心にも自分わ何にならうかと考えはじめました。その頃ある人の世間話に、「江戸にわ太平記四十卷をそらよみする評判の高いめくらがある。日々方々のおやしきによばれて、ゆうふくにくらしている。」ときゝました。保己一は、「めくらでも、世の中のやくにたつにわ、いなかにいてわしかたがない。江

戸に出なければならない。」と決心しました。

十五の年父のゆるしを得て、江戸に出ましたが、その頃のめくらわ、音曲かあんまはりのわざをならうより外に道がありませんでした。保巳一もそれをならいましたが、一つも出來あがりません。保巳一もあまりに自分の不器用なのにおどろいて、幾度か死のうと思つたほどでした。ある時師匠が保巳一をよんで、「おまえにわ見所がある。これから三年のひまをやるから、自分のしたいと思うことをして見るがよい。」といいました。保巳一が學者になろうと決心したのわこの時でした。それから後わ、朝夕天神様におねがいして、一心に書物をきゝならいました。一度きいたことわ決して忘れません。三年の間に名高い書物をきゝおぼえて、めづらしいめくらの學者と、人にも知られるようになりました。

人の一心わおそろしいものです。保巳一が江戸に來てから二十年、勉强したかいがあつて、日本の古い書物を人に敎えるようになりました。

ある夜のことでした。多くの弟子をあつめて書物を敎えていました。その時風がにわかに吹きこんで、ろうそくの火をけしました。さあ大へん、まつくらになつて、書物の字を見ることが出來ません。けれどもめくらの先生にわそれがわかりませんから、話をずん〳〵進めていきます。弟子の一人わたまらなくなつて

「先生、少しお待ち下さい。ただ今風のためにあかりがきえました。」

といいますと、保巳一は笑つて、

「おや〳〵、目のあいているものわ、あかりがなくてわ本が讀めないのか。不自由なものだ。」

といいました。

保巳一は七十七歳でなくなりましたが、その間に日本の古い書物をしらべて、多くの書物をまとめました。

塙保巳一は畸人傳中の人だ。この人の前にこの種の人なく、この人の後にこの種の人はない。博聞强記はその天賦、しかし非凡の努力も、その大成にあづかつて力あることはいふまでもない。國語敎材としての價値は、自己を知つてそれをよ

く育てたことと、川柳によつてその偉大をたゝへたところと、不合理のことばが、この人にのみは許さねばならぬその力であると思ふ。この三點は取扱者の工夫を要するところである。

第一時には全文通讀、讀み得た所をまとめて考へさせたい。―おのれの長所を知つて、努力して育てあげたこと。えらい人であつたこと。（かの川柳は世人の評で、目あきは不自由なものだとは保巳一の力）など―次に傍線を施した十一の語句を書かせ、それについて塙保巳一のめづらしい人であること、一生の修行と事業及び世評を概觀させたい。

「番町で目あきめくらに道をきゝ」は、諷刺皮肉を生命とする當時の川柳である。「番町」とはこゝでは「保巳一の家」といふ程の意。生國又は住所の町名などで、その人を代稱することは、ある社會には殆ど普通のことである。目あきがめくらに道をきいてゐるが、とんだ逆轉の事だと皮肉つた。道は道路ではなくて、人道の義。聽講者を皮肉つたのは、要するに道を說いてゐるめくらのえらい事をたゝへたもの。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に「或夜弟子をあつめて。」以下全文を書かせて、その場面を文を通して想像させ、「さて〳〵目あきといふものは不自由なものだ。」は不合理至極の言だが、それをこの場合は合理の語としてきかなければならぬ。ことばといふものは、これを使用する人によつて、その意義まで變化するものだといふことを知らせたい。

餘談ながら、この課の記事の一段ほど、私にいやな感じを持たせるものは少い。以前の讀本には、まだ〳〵くどく書いてあつたが、國語讀本はあつさりして來た。けれどもその要のありやなしやを疑ふと共に、眞劍の文のやうな氣がしない。讀本中の研究を要する箇所だらう。

教　材

目は見ゆれども、字のよめざる人をあきめくらといふ。昔はあきめくらも多かりしに、まことのめくらにして、大學者となりし人あり。塙保巳一これなり。（古來唯一人。）

保巳一は五歲の時めくらとなりしが、（若し失明しなかつたら。）人に書物をよませて、一心に

之を聞き、後には名高き學者となりて、多くの書物をあらはせり。（強記無類。）

保己一の家は今の東京、其の頃の江戸の番町にありて、多くの弟子保己一につきて學びたれば、時の人（川柳子。）

番町で目あきめくらに道をきゝ。（ついて學ぶ者を皮肉るのは保己一をたゝへる義。）

と言ひたりといふ。

或夜弟子をあつめて、書物を敎へし時、風にはかに吹きて、ともし火きえたり。（目あきには大變。）保己一はそれとも知らず、話をつゞけたれば、弟子どもは

「先生、少しお待ち下さいませ。今風であかりがきえました。」（正直者。笑はれるぞ。）

と言ひしに、保己一は笑ひて、

「さて〳〵、目あきといふものは不自由なものだ。」（不合理の語が合理に聞える。それは保己一がえらいからだ。）

と言ひたりとぞ。

第十八　アメリカだより（五時間）

七の巻の巻頭に世界を見て、大連だより、航海の話、揚子江と進んで、本課に達したのである。アメリカ合衆國と我が國は、太平洋を中にして、相對してゐる强國で、かの國の事情を明かにする事は、世界を理解する上にきはめて大切なことである。

この課の材料は、さる文學博士が約一箇年間米國に旅行せられて、その各地より愛嬢（尋四）に通信せられた書簡によつたものではあるまいかと思ふ。それによく似たふし〳〵がある。とにかく現實の書簡によつたものとすると、言々句々にしつくりした重みがつく。とにかく父の愛を感じつゝ、父の見聞所感のあとをきくのだから自然だ。それを他の者が讀んで、その餘澤を蒙むるのである。

一　サンフランシスコより（二間時）

この手紙は、五月五日にサンフランシスコについて、七日に出したのである。十五日目についたとあるから、横濱の出帆が四月二十一日で、ハワイのホノルルに寄

港したのは、三十日のことだらう。こゝから出された繪葉書を輕く考へてはならぬ。常に父の頭を往來してゐるものは、太郎・さち子のことである。

ハワイ諸島は赤道の北にある火山列島で、植物がよく繁茂し、砂糖の產がきはめて多い。住民約二十五萬、その中十一萬は我が國人で、大抵甘蔗の耕作に從事してゐる。首府ホノルルはオアフ島にあつて、太平洋航路の要港である。わが東洋汽船會社のサンフランシスコ香港線、及び南米線の汽船は、往復ともにこゝに寄港する。

サンフランシスコは北米西海岸の良港で、人口五十一萬人、日本人の在住する者八千人、太平洋航路と大陸横斷の鐵道とを連絡する結節點である。商業がさかんで、我が日本郵船、大阪商船、東洋汽船の寄港地になつてゐる。明治三十九年四月十八日に大震災があつて、慘害を蒙つたが、今は前にも增して立派になつてゐる。

カリフオルニヤ州――サンフランシスコのある州――には日本人が八萬人もゐるといふ。西部地方では最も多いといふことだ。その大多數は農業その他の勞働に從事してゐる。勤勉で賃金の安い勞働者であるために、白人勞働者からきらはれ種々の理由をつけて、排斥されてゐる。挿畫はカリフオルニヤのいちご畑である。

第一時には全文通讀、讀み得た所をまとめて考へさせたい。――無事サンフランシスコ着。サンフランシスコの氣分。この地の元氣。この附近のカリフオルニヤ州のこと等――次に傍線を施した十の語句を書かせ、この手紙前半の意義を確かに知らせたい。ハワイに就いても、サンフランシスコに就いても、――良港であること、大陸横斷鐵道との結節點であること、及び活潑な商業地であることなど――補說したい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に「此の州は。」より「日本語で學問をしてゐます。」まで書かせて、排日のさかんなこと、それだけ我が國とは關係の深いことなどを知らせたい。全文を見とほして、この手紙を書かれた時の父の心持をよくよく考へさせたい。

二　シカゴから（一時間）

父がサンフランシスコの滯在は約四箇月だつた。多分西部地方の所々を視察してをられたのだらう。しかし汽車はサンフランシスコから、大陸横斷鐵道を三日二晩乘通して、シカゴにつかれたのであるから、ロッキー山脈を越えたり、大鹹湖の上を走つたり、牧場の羊の群を見たりなすつたのだ。

シカゴはミシガン湖畔の大都市で、人口二百七十萬、合衆國第二の都會だといふ。もと一小邑に過ぎなかつたが、にはかに發展して、今は黑雲の濛々たる工業の大都市である。ことに穀物・肉類の一大市場である。こゝにはかの名高いストックヤードがある。豚・羊・牛の屠殺からハムになるまでを、大きな機械仕掛で約二時間で仕上げるのだ。こゝで一年間に取扱ふ家畜は、牛が三百五十萬頭、犢七十五萬頭、豚八百七十萬頭、羊五百二十萬頭、總計一千八百餘萬頭、一日の屠殺力は、牛二千八百頭、羊一萬頭、豚九千六百頭、犢二千頭といふこである。この事業の關係者五萬人は、シカゴ市中に一劃をなして生活してゐるといふ。まづ全文を讀ませる。三日二晩の汽車でみたもの、シカゴ市について讀み得たものをきいてみる。「此所は工業地で」から終まで書かせて、シカゴの概觀をたしかめると共に、前掲の事項の中、然るべきものを補說したい。

三　ニューヨークから（二時間）

シカゴの滯在は四箇月あまり、大陸の横斷がこゝで終つた譯だ。

ニューヨークは合衆國大西洋岸の正門ともいふべき所で、ハドソン川の口に臨み、新大陸第一の都市である。人口は七百萬以上あるさうで、ロンドンに次ぐといふ。ニューヨークにいつて來た人が、「自働車の多いことがまづ目についた。」といつた。次に「建物の亂雜なこと、殊に空中に畫き出す線の亂暴なこと。又色彩の雜多にして、毒々しいこと。公園も街頭も、落葉と新聞紙できたなかつたのに驚いた。」といつた。又「世界第一の高い建物ウォルウヰッチのビルヂングに昇つて見た。五十五階ですてきに高いものだつた　樓上のバルコニーに立つて見ると、眼下にニューヨークの市街が、灣と二つの河の間に

見え、工場の煙は盛に立上つて、交通機關はまるで黒蟻の行列を見るやうだつた。」といつてゐた。ニューヨークは世界の大市場で、輸出入の總額は四十億、世界諸港中の第一位だといふことだ。

第一時にはニューヨークからの手紙全文通讀、讀み得たところ—汽車の速力、建築物、市内の交通、アメリカ氣質、文化設備、旅の心持—について考へさせたい。傍線を施した十四の語句を書かせて、ニューヨークの概觀をたしかにさせたい。

第二時にもニューヨークの全文通讀、第一時の復習、次に傍線を施した八つの語句を書かせて、父の旅中の心持をよく〳〵考へさせたい。なほ三つの手紙を通讀して、アメリカについて學び得たこと、子どもらの父に對する心のうごき、三つの手紙に對する返事などについて考へさせたい。

教材

一　サンフランシスコから

ハワイから出した繪葉書は見ましたらうね。（父の忘れられないものは太郎とさよ子）おとうさんは一昨日の正午無事にサンフランシスコへ着きました。横濱を出てから、ちやうど十五日目です。（太平洋を一瞰して）

サンフランシスコには、日本人がたくさんゐて、いろ〳〵な商賣をしてゐます。（うどんやもある。）おとうさんが着いた日は、ちやうど五月のお節供の日で、日本人の家には、鯉のぼりが立つてゐました。（そぢろに我が國を思ふ。）

此の港には、十五六年前に大地震があつて、町は大方こはれたのですが、（慘害甚大。）今では前よりもかへつてりつぱになつてゐます。（復興のつよし。）アメリカ人の元氣なことは、これだけ聞いてもわかりませう。（物資の豐富な國。）

サンフランシスコはカリフォルニヤ州にあるのですが、此の州は合衆國の中でも、氣候がよくて、其の上地味が肥えてゐますから、いろいろな農產物に富んでゐます。ことに野菜や果物（いちご、りんご、みかん。）が有名です。日本人は八萬人餘も居て、子どもは、アメリカ人の立てた學校へ行つて、英語で勉強しますが、歸つて來ると、又日本人の立てた學校へ行つて、日本語で學問をしてゐます。（アメリカ人に二重の仕事。）お前たちよりもよけいに勉強してゐるわけです。（なりきれぬ。）つまりお前

たちもせい〳〵勉強なさい。

五月七日　父から

太郎どの

さち子どの

二　シカゴから

サンフランシスコから三日二晩汽車に乗通して、今日此のシカゴに着きました。（合衆國第二の都會）此所は工業地で、煙突の煙で空は眞黑だが、（ミシガン湖畔でもあり。）大きな公園が幾つもあるから、健康には害がなささうです。此の繪葉書は此所へ來る途中、汽車の窓から見た牧場の實景です。（日本では見られない眺めだ。）

九月五日

三　ニューヨークから

長く滯在してゐたシカゴ市を立つて、今日いよ〳〵米國第一の大都會ニューヨーク市に着きました。（大西洋岸の正門。）

シカゴとニューヨークの間は九百八十哩もありますが、おとうさんは最大急行の列車に乘つて、たつた十八時間で着きました。（五四哩餘の速力。）日本にはまだこんな早い汽車はありません。（狹軌では出ない。）

ニューヨークは人口からいへば、ロンドンに次ぐ大都會で、七百萬以上もあるといひます。高い建物のあることは世界第一で、十階、二十階の家はいくらもあります。中で最も高いのは五十五階もあります。（空中に畫く線が亂暴だ。）

地上の鐵道には勿論、高架鐵道にも、地下鐵道にも、電車や汽車が終日終夜、休なしに運轉してゐます。（その繁華が思はれる。）アメリカ人は大きいこと、廣いこと、高いことと、早いこと、何でも世界一になるやうに心掛けてゐるといひますが、（對立觀。）何しろ大した勢です。（アメリカ氣質。）

此所は有名な商業地ですが、りつぱな學校もありますし、博物館や圖書館などもたくさんあります。

シカゴを立つ日に、お前たちの年始狀が着きました。（誰よりのよりもうれし。）二人とも字

が上手になつたのに驚きました。（孝行の仕方。）うちには何事もないさうで安心しました。其の内に繪葉書や寫眞帖を送りますから、ゆつくりごらん。（シカゴやニューヨークのを。）おかあさんによろしく。（愛子への手紙はそれが母への。）

一月十八日

太郎どの

さち子どの

父から

第十九　コロンブスの卵（一時間）

この課はアメリカ大陸を發見したコロンブスの逸話である。單にコロンブスの奇智を傳へたやうにも思はれるが、人生問題として考へると、味はうべきことが多くふくまれてゐる。

コロンブスがイスパニヤの皇后イサベラの援助によつて、いよ〳〵西航探險することのきまつたのは、西暦千四百九十二年（皇紀二一五二年後土御門天皇の明應元年）四月十七日のことである。時に年五十六。

遠征隊がパロス港を出帆したのは同年八月三日。

カナリヤ群島で船修繕のために二十日あまり碇泊。

パロスを出てから、西航既に二千二百五十哩に達した。

いよ〳〵陸地を發見、上陸したのが十月十二日。

三十九人の部下を島にとゞめて、千四百九十三年一月四日歸航の途についた。

同年三月十五日パロス港に歸着。

第二回の探險中、讒をかまへるものがあつて、第三回の探險中に逮捕の者がむかつた。それは西暦千五百年十月のことである。

この課の着眼點は、一面にはコロンブスの奇智、輕薄子の肺腑をゑぐつて、餘喘なからしむるところにあり、一面人の成功をいひけさうとする輕薄子に頂門の一針を加へるところにある。けれども更に深く考へると、コロンブスはこの卵で成功し、この卵で失敗したのではあるまいかとも思はれる。奇智、頂門の一針に着眼すると、華やかに卵で成功し、讒にあつたことに着眼すると、この卵で失敗してゐる。

さきに人生問題としてといつたのは、之を意味してゐるのである。

全文通讀、次に讀み得た大體の事實をまとめて考へさせたい。次に傍線を施した十二の語句文を書かせ、輕薄子の言とコロンブスの最後の言を比較して、コロンブスの奇智と、輕薄子には頂門の一針であることを知らせたい。

餘暇があつたら、コロンブスがあまりに得要領であるために、人の讒にあひ、事業の大成をなし得なかつたことを考へさせたい。水清ければ魚すまずといひ、人察なれば徒なしといふ。コロンブスが三回の探險中に捕縛されて、足を鐵鎖でつながるゝや、その家人に遺言して、「我死なば、この鐵鎖を共に棺に納めよ。」といつた人は成功すればする程、謙虚にならなくてはならぬ。コロンブスが卵を立てないで、「だれにでも出來る事です。」と心に誇らないでをれば、コロンブスの功をさらに大きくしたことと思ふ。私はコロンブスのためにこれも亦天二物を與へざるものかと常にをしんでゐる。

教材

コロンブスがアメリカを發見して歸つた時、（意氣揚々。）イスパニヤ人の喜んだことは非常なものでした。（懸の皮も手傳つて。）一日祝賀會の席上で、人々がかはる〳〵立つて、コロンブスの成功を祝しますと、（魂のぬけた聲もあつたらう。）一人の男が

「大洋を西へ〳〵と航海して、陸地に出あつたのが、それ程の手がらだらうか。」（癪にさはつて。）

といつて冷笑しました。（わるいくせだが誰にでもある。）

之を聞いたコロンブスは、つと立つて、（小さい。小さい。すてておくものだ。）食卓の上のうで卵を取り、

「諸君、こゝろみに此の卵を卓上に立ててごらんなさい。」（智慧がありすぎる。）

といひました。人々は何の爲にこんなことをいひ出したかと思ひながら、やつて見ましたが、もとより立たうはずはございません。（後に眞意を知つたらよい感じはしまい。）

此の時コロンブスは、こつんと卵のはしを食卓にうちつけ、何の苦もなく立てて申しました。

「諸君、これも人のした後では、何のざうさもない事でございませう。」（誇が鼻の先についてゐるそれが足の鎖だ。）

第二十　稅（二時間）

父の外出からはしなくも納稅の話が出て、稅に關する父の敎をうけるといふが、この課の筋である。

租稅は國家が其の職分を行ふに、必要なる收入を得んがために、其の權力を以て、一般人民より徵收する財をいふ。國家は其の存立を保持して、國民の生命財產を保護し、其の安寧と幸福とを增進するを以つて目的とするもので、これらの職務を盡さんがために、軍務・外交・司法・行政・財政・敎育等の政務を行ひ、官吏を任命して、其の任に當らしめなければならぬ。故に官吏の俸給、手當、其の他必要なる現品に充てんために、收入の必要起り、隨つて租稅法は起つたのである。稅率は國家がこれを定めるもので、その範圍に於て府縣稅は府縣會で、町村稅は町村會でこれを議定して賦課するのである。故に稅には國の稅と、府縣の稅と、町村の稅とがある。國の稅は地租・所得稅の如く、全國平等に賦課して、國庫の收入となるもの、府縣の稅は地租附加稅・家屋稅・營業稅・理髮人稅・車稅・水車稅・畜犬稅・倉庫稅の如く、府縣の收入となるもの、町村の稅は、地租附加稅・縣稅・家屋稅附加稅・縣稅營業稅附加稅・縣稅雜種稅附加稅の如く、町村の收入となるものである。

何事でも父に質問してゐるこの兒童のやうに、身邊におこる事實について、研究する態度で進めば、知らず〳〵の間に、重要なる智識を收得することが出來る。卽ちこの課は稅法のおこつたわけ、期限內の納稅、及びこの兒の研究態度に着眼して取扱ふべきである。

第一時には全文通讀、讀み得た所をまとめて考へさせたい。—何故に稅を納めるか。稅の種類は何によつて生ずるか。何故に期日までに納めなければならないか等をきいてみたい—「あと二枚は」より前に、傍線を施した九つの語句を書かせて、期日までに納稅する必要、及び村の稅その費途を明かにしたい。

第二時にも全文通讀、第一時の復習「あとの二枚は」以下傍線を施した十二の語句

を書かせ、縣の稅と國の稅、及びその費途等を明かにしたい。納稅は國民の義務であることを十分に知らせると共に、その租稅を有效に使用する當路者も亦國民の一部分であることを知らせたい。國民としてその義務を十分に果すと共に、國民としてその責任を十分に盡さねばならぬことを知らせなければならぬ。

教　材

「おとうさん、此の雪降りに、何所へお出でになりますか。」（よい事を見つけた。）

「役場へ稅を納めに。」（父は責任を重んじて。）

「明日にでもなつて雪がはれてからではいけませんか。」（雪をきづかつて。）

「是非今日のうちに納めなければなりません。此の切符に、『一月二十日限り當役場へ納付』とありませう。今日までに納めないと、役場によけいな手數をかけることになります。」（納稅の義務。）

「今手に持つていらつしやるのは、みんな切符ですか。」

「さうです。三枚とも切符です。」

「それをみんなうちで納めるのですか。」

「さうです。此の一枚には徵稅令書とありませう。これは村の稅で、村の學校や役場の費用などになるのです。」（村の稅はよくわかる。）

「あとの二枚は。」

「一枚は縣の稅で、一枚は國の稅です。ごらん、これには徵稅傳令書とありませう。これは縣の稅で、縣立の學校や病院や其の他道路などの費用になります。（村からおして考へられる。）それからこれは國の稅で、納稅告知書としてあります。軍隊や、裁判所や、外國とのつきあひや、其の他いろ〳〵の費用になるのです。（事が大きいがよくわかる。）國の稅は勿論、縣の稅もみんな大事なもので、之を納めることは國民の務です。」（稅を出すは町村の仕事、府縣の仕事を直接にしてをるのだ。）

「縣や國の稅も、村の役場へ納めればよいのですか。」

「さうです。村役場で、村内の家々から納めるのをまとめて、それ〳〵へ送るのです。」

「どのうちでも、納める金高は同じですか。」

「いや、それは財産や收入の多少によつて違ひます。（差別即平等の眞相。）くはしいことは又學校で習ふでせう。雪も小降りになつた。役場のひけないうちに行つて來よう。」

第二十一　水の力（二時間）

この文は目さきがかはつてゐる。淺く讀めば、水の力を說明したやうであり、深く讀めば、水の力によつて修養を說いたやうである。明治天皇の御製は、水の力を人の力にと仰せられたのかとも拜察せられるし、第三段の水力電氣は、全く水の力を說いたものと思ふ。その中間にある第二段は、第一段と第三段をはぎあはせたやうである。この課はそこに着眼して、まづ水の力として讀ませ、次に水の力を人の力にといふ御製の御心に添ふやうに讀ませたいと思ふ。

第一時には全文通讀、讀み得たものについて考へさせたい。―第一段は御製、第二段は水は器にしたがひて、樣々の形にかはる。けれども弱いものではない。長時間かゝれば、大きな仕事をする。第三段は長時間かゝらなくても、現在水力電氣はあんな大きな仕事をしてゐる。―第二第三段に傍線を施した十の語句をかゝせて水の力を主としてしらべさせたい。最も兒童の生活にちかい水車・筧・田を養ふ事などを引例して、水の力を知らせたい。水には平均しようとする力の外に、物を浮べる力を持つてゐる。大船巨船をうかべるのはそれだ。しかし大船巨船を呑むのも水の力だ。それらも併せて說きたい。

第二時には全文通讀、第一時に取扱つた水の力について復習、次に第一段全文を書かせ、なほ

水には形がないかしら。―蓮の葉におく露から。

水は平にならうとする力がある。―流れるのも、波立つのも、瀑になるのも、田を養ふのも、測量器械ではたらくのも。

水は物をうかべる力がある。―船でも、筏でも。

傍線を施した部分を書かせて、兒童の經驗觀察してゐる事をまとめて考へさせた

い。御製を最後に取扱つて、器のまに〳〵平均し、安靜に歸さうといふ性質から、不平均を生じた場合には、低い方へ流れて、安靜になるまでは少しもやまない。邪魔になるものは押流したり、穴をあけたり、いろ〳〵強い力をあらはす。水のやうに物にかゝはらずして、しかも自分の性を少しもまげず、長い間を堪えていく強い力が持ちたい。昔から明鏡止水など修養の鑑として考へられたことなど補說して、水よりうくる人生の教訓を考へさせたい。

教材

明治天皇の御製に、

器にはしたがひながら、いはがねも
とほすは水の力なりけり。

といふ御歌がある。

水にはこれといふ形がない。（形のないのが水の形だ。）いれ物次第で、圓くもなれば、四角にもなる。（自由自在ものにとらはれぬ。）それでは弱いものかといふに、さうではない。（平均を求めて動く場合。）落ちる時の勢が加はると、長い間には、思ひの外の事をする。（加はつた力は大きい。）雨だれでも石をうがつ。

長い間かゝらなくても、工夫して大仕掛に水を落せば、大きな仕事をする。（仕事がしたいのではない。平均）彼の水力電氣の如きはそれで、（水車でも。瀑布でも。）電燈・電車等に用ひる電氣も、もとをたゞせば水の力である。（萬頃の田を養ふも。大きな船を呑むのも。）

第二十二　啞の學校（五時間）

こゝろみに五の卷以下の長篇物を顧みてみよう。五の卷には用水池、六の卷には萬壽姫、七の卷には安倍川の義夫、八の卷にはこの課である。人間の本性は、事件の發生した時に、最もあざやかにあらはれるものと思ふ。前掲四長篇の事件を比較すると、その峻辣さはこの啞の學校が最も強い。世人の批難攻擊の的になつて、一命を賭して事にあたるのは、苦しい中にも自らなぐさめるふしがある。深く敵

地に入つて、母を助け出さうといふには、よし事露見に及んで殺されても、母と死所を一にするといふ安心がある。なすべき事を正しく行つて、心の平和に滿足しようといふには、苦しいこともあるが、これが神の御心に通ふといふ安心がある。啞の娘を持つた信吉の苦しみは、何の因果でと自らいふやうに、なぐさめる道がない。しかし片輪の子ほどかはいいといふから、美しく育てば育つで、大きくなればなるで、ふびんにおもふのは親心だ。前の三長篇に比して、波瀾は大きくはないが、心の上にはきはめて深刻なものがあると思ふ。親の悶えが教育によつて多少救はれていく所に着眼して、感謝に生きるこの父子に同情させたい。世の中には決して乏しい事實ではない。イタリヤのアミチス原作、クオレの聾啞を翻案したものである。

信吉の身の上は、他家に奉公してゐて、心掛のよい者であるところから、主人の世話で結婚した。さうして設けた一人の娘が啞で、妻はそれを苦にして程へて死んだ。そこで啞の娘を主家に託して、ハワイに出稼にいつて三年、多少の金を握つて歸つたのであらう。歸つて學校をたづねた一二時間がこの文である。信吉のハワイ出稼は、多少得意になつて歸つたが、ふびんが先にたつて、常に心に暗い影をなげるのはおとよである。それから學校を訪うて、ものがいへるやうになつたのに驚き、卒業すれば一人前になれるときいて、廢物とばかり思つてゐた我が子の前途に、光明を認めて喜んだのである。その煩悶の輕減されていく、信吉の心の動きに着眼して取扱ふべきである。

第一時には全文通讀、讀み得たところをきいてみたい。—信吉がハワイから歸つて來た。啞の學校をたづねた。おとよがものをいつた。教育の仕方を見せてもらつた。おとよの前途に光明をみとめた—次に傍線を施した九つの語句について、この課の概觀を確實にさせたい。

第二時には全文通讀、—五つに切つて—第一時の復習、次に本日の箇所を通讀、事の發端について考へさせたい。「奥樣あのとよは。」から「お前も一しよに行つてお出で。」までの對話を全部書かせて、その言葉にこもる感じを考へさせたい。なほ信吉の身の上を想像させたい。

第三時には全文通讀、第二時の復習、本日の箇所「學校へ行つて案内をこふと。」か

ら八十八頁の「と答へた。」まで讀ませ、次に

學校へ行つて案内をこふと。信吉はのび上るやうにして奥の方を見た。お

とよは信吉の顔を見ると、かけよつて來ていきなり信吉にだきついて泣いた。

娘の手をはなして。何のいんぐわで、ひさしぶりに歸つた私に、一口も口をき

くことが出來ないのでございませう。「此の方はどなたですか。」「わたくしの

おとうさん。」

を書かせて、親子の眞情と驚を知らせたい。

第四時には全文通讀、第三時の復習、次に本日の箇所「信吉はびつくりして。」から

「大きな涙をぽた〳〵落した。」まで讀ませて、

二足三足後へ下つて。教育のおかげで。口の動き方を見て。

「おとよおとうさんが歸つてうれしいか。」

「はい、うれしうございます。もう何所へも行つて下さいますな。」

「もう〳〵何所へも行きはしない。」

を書かせて、親一人子一人の對話にこもる涙を思はせたい。

第五時には全文通讀、第四時の復習、次に本日の箇所九十二頁の「先生はいろ〳〵

な事を。」から終までを讀ませ、

書き方。算術も裁縫も料理も。學校を卒業する頃。商店の番頭。五十音の

發音。どうも恐入つたことだ。

「何なら、あのお子を今日一日お連れになつてもようございます。」

「いや、何、それには及びません。」

「では、一日お借り申します。近所の者に見せてやりたい。」

を書かせて、この對話にこもる信吉の心の動きを特に知らせたい。—先生は親心

を察してのお言葉だが、「いや、何、それには及びません。」は「それほど甘くはありませ

ん。」と親らしい色を見せたのだが、さういつた後から「近所の者に見せてやりたい。」

は親の眞情である。對話にこもる感情をよくきかせたいと思ふ。なほ全文を見

通して、信吉の悶えが、教育の力で輕められる次第を考へさせたい。

教材

もと僕のうちに奉公してゐた信吉が、昨日の朝三年ぶりでハワイから歸つて來

た。（かせぎにいつてゐて。）信吉にはおとよといふ今年十一になる女の子があるが、生れつき啞なので、僕のうちで世話して、啞の學校に入れてある。（母にわかれた不幸な子。）信吉は僕の兩親に歸つて來たあいさつをすますと、

「奥樣、あのとよは。」（片輪の子ほどかはいい。）

と、さも心配さうにたづねた。母が

「とよちやんかね。丈夫でゐるよ。」（よく育つてゐるよ。）

といふと、信吉はほつと息をついて、

「ありがたうございます。（親心。）それをお聞きして安心致しました。あちらでも、あの子のことばかりが氣にかゝつてゐたのでございました。（一目見たい。）それではちよつと行つて參ります。」

といつて、すぐ出かけようとした。父は

「相かはらずせつかちだね。」（信吉の性格、この一語につく。）

といつたが、別に止めようともせず、僕に、

「お前も一しよに行つてお出で。」（何も見學。）

といつた。僕ははかまを着けて、信吉と一しよに出かけた。（父子對面の場を樣々に想像しながら。）學校へ行つて案内をこふと、小使が出て來た。

「私はこちらに御やくかいになつてゐる松木とよの父でございます。ちよつととよにあひたくて參りました。」

といふ間も、信吉はのび上るやうにして奥の方を見た。（親の眞情。）小使は僕等を應接室へ通して出て行つたが、間もなく黑い服を着た先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。生徒はおとよであつた。おとよは信吉の顔を見ると、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。（どんなにあひたかつたらう。）信吉は

「おう、おとよ。」

といつて、娘の手をはなして、（みつともない。）頭の先から足の爪先までながめたが、しばらくして、

「おとよ、大きくなつたなあ。（心からの滿足。）わしはあちらに居ても、お前の事ばかり

心配してゐた。」（親がゐなくても子はそだつ。）

といつて、今度は先生に向つて、

「あゝ、あなたが先生でいらつしやいますか。娘が大そうお世話様になります。（感謝）私は三年ぶりに此の子にあふのでございますが、（大きくなつてゐまするのにつけても。）何のいんぐわで、ひさしぶりに歸つた私に一口も口をきくことが出來ないのでございませう。」（親としてはこのふびんさがいつもつきまとふ。）

といふと、先生はおとよに、低い聲できかれた。

「此の方はどなたですか。」（變だぞ。）

するとおとよは、にごつた聲で、ゆつくりと、

「わたくしのおとうさん。」（おや〳〵。）

と答へた。

信吉はびつくりして、二足三足後へ下つたが、（道理々々）

「や、口をきいたぞ。おとよ、お前はものが言へるやうになつたのか。ありがたい。もう一つ何とか言つておくれ。」（こんなうれしいことはない。）

といつて、娘を引きよせて、

「先生、どうして口がきけたんでせう。ほんたうにふしぎなことだ。」（まつたく。）

「いや、今では教育のおかげで唖でもものが言へるのです。」（教育は神のわざ。世に廢物はない。）

「それはありがたい。おとよ、わしの言つてることがわかるか。わしの聲が聞えるか。聞えるなら、もう一つ何か言つておくれ。」（うれしくてもせきこんではだめ。）

先生はにこ〳〵して、

「いや、聲が聞えるのではありません。口の動き方を見てさとるのです。」（信吉にはわかるまい。）

信吉はまだ先生の言はれたことがわからなかつたと見えて、娘の耳に口をよせて、

「おとよ、おとうさんが歸つて來て、うれしいか。」（せつかちだね。）

と大きな聲で言つたが、おとよは何も言はないで、信吉の顔を見てゐる。先生は

「あなた、此のお子が返事をしないのは、あなたの口が見えないからです。よく見えるやうにして、もう一度しづかに言つてごらんなさい。」（親の教育だ。）と言はれた。信吉は少しはなれて、今度はおとよの顔を見ながら、

「おとよ、おとうさんが歸つて、うれしいか。」

と言つた。おとよは信吉の口を、中までのぞきこむやうにしてゐたが、

「はい、うれしうございます。もう何所へも行つて下さいますな。」（あはれな子の眞情。）

と、はつきり答へた。信吉は

「もう〳〵何所へも行きはしない。」（親一人子一人だ。）

といつて、大きな涙をぽた〳〵落した。（先生、どめんなせい。）

先生はいろ〳〵な事を信吉に話して聞かされた。おとよは話し方ばかりでなく、書き方も算術も裁縫も料理も習つてゐる、大そうりこうだから、もう二年たつて、此の學校を卒業する頃には、りつぱに一人前の事が出來るやうになる。（前途の希望。）げんに此の學校の卒業生で、商店の番頭になつてゐる者もあれば、裁縫の先生になつてゐる者もあるなどと話された。（世の役にもたつか。）信吉はとりのぼせたやうにうれしがつて、（苦勞のもとが一掃されて。）娘の顔と先生の顔を、かはりばんこに見てゐた。

それから先生は、僕等を一年生の教室に連れて行かれた。此所では、女の先生が、生徒に五十音の發音を教へてゐられた。「い」を「う」と間違へたり、「う」を「え」と間違へたりするのを、先生は根氣よく、何度も〳〵教へてゐられた。（見ればなる程とわかる。）信吉は教室を出ると、

「先生、私の娘にもあゝして教へて下さつたのでせうか。どうも恐れ入つたことだ。」（心からの感謝。）

といつて、先生を廊下でをがむやうにした。先生は

「何なら、あのお子を今日一日お連れになつてもようございます。」（先生の慈悲。）

といはれた。信吉は

「いや、何、それには及びません。」（見上げた。）

といつたが、すぐ

「では、一日お借り申します。近所の者に見せてやりたい。」（それでこそ親だ。よく見上げた。）といつて、應接室に待つてゐた娘の手を取つて、幾度も先生におじぎをした。さうしてみんな一しよに學校の門を出た。

第二十三　名古屋市（二時間）

名古屋市は一名を中京といつてゐる。東京と京都の中間に位する意であらう。徳川の城下町として、又熱田神宮を中心として發達したのであるが、明治四十年開港場として、指定せられ、築港が完成して、大船巨舶の出入が自在になつてから、商業工業頓に敏活を加へ、今は貿易額横濱・神戸・大阪・門司・名古屋といふ位置をしめるやうになつた。世界に對する横濱・神戸の中間門戸として注意すべき所となつた。

主要輸出品は陶器・綿絲・時計などで、主要輸入品は木材・肥料・小麥等である。

しかし名古屋といふ語に聯想の最もつよいのは名古屋城である。東海道で名古屋城、山陽道で姫路城は、蓋し日本の二名城であらう。何といつても、徳川家康がその子義直のために、外樣二十六大名に命じて築かせたもので、加藤清正が城普請の總取締、天守閣の工事は自分が引受けて、入念に築き上げたのであるから、すばらしいものである。棟の南北兩端に、金の鯱が立つてゐるが、時價につもつて三百五十餘萬圓だといふから、これも亦たいしたものだ。

「伊勢は津でも持つ、津は伊勢で持つ。」と前の句があつて、「尾張名古屋は城で持つ。」と歌ふのであるが歌の意は、「伊勢とは皇大神宮のことで、津とは藤堂家のことださうな。皇大神宮は藤堂家の守護によつて尊嚴に、藤堂家は皇大神宮守護といふので、家格が高い。尾張名古屋は城あるがため、天下に名を知られるといふ意だ。」と友納君が教へてくれた。要するにこの俗謠は名古屋の歌で、伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ如く、尾張名古屋は城で持つといふのだらう。

熱田神宮には草薙劒が御神體としてまつつてある。祭神は天照大神・素戔嗚尊・日本武尊・宮簀姫命・建稻種命である。

第一には全文通讀、讀み得た所をまとめて考へさせたい。―名古屋市の大都會

であること。商工業の盛んなこと。名古屋城のこと。熱田神宮のこと等一一次に傍線を施した八つの語句を書かせて、名古屋の概觀をたしかにさせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に

徳川家康が諸大名ニ命ジテ造ラレタルモノニシテ。

天守閣ハ加藤清正ノキヅキシ所ナリ。

朝日夕日ニカゞヤキテ、遠ク數里ノ外ヨリ望ミ見ルコトヲ得ベシ。

「尾張名古屋ハ城デ持ッ」ト歌ハレタリ。

を書かせ、徳川家康の威勢できづかせたる城、これを中心として發達したる町、金ノシャチホコの時價「尾張名古屋ハ城デ持ッ」の歌の意義を補說したい。因に名古屋を單に城のある名所といふやうに取扱つては物足りない。商業の活潑な貿易の盛な、中京の名にそむかぬ所として考へさせたい。

教材

名古屋市ハ我ガ國屈指ノ大都會ニシテ、(中京ともいふ。)人口四十餘萬アリ。商工業盛ニシテ、燒物・塗物・扇・綿絲・織物等ノ產出頗ル多シ。(景氣のよい市。)

此所ニ名高キ名古屋城アリ。(何といつても日本一。)三百年前徳川家康ガ諸大名ニ命ジテ造ラシメタルモノニシテ、(よいだ。譯)其ノ天守閣ハ加藤清正ノキヅキシ所ナリ。(濃美の地震にもびくともせぬ。)天守閣ニハ棟ノ兩端ニ金ノシャチホコアリ。其ノ高サ八尺五寸、(時價三百五十萬圓。)朝日夕日ニカゞヤキテ、遠ク數里ノ外ヨリ望ミ見ルコトヲ得ベシ。(名古屋名物。)

名古屋市ハ此ノ城アルニヨリテ名高ク、「尾張名古屋ハ城デ持ッ。」ト歌ハレタリ。

市ノ南部ニ熱田神宮アリ。草薙劒ヲマツル。(お城とお宮。)

第二十四　廣瀨中佐（二時間）

軍神と仰がれた廣瀨中佐の最後は美しかつた。この歌によつて、旅順港口閉塞の行動を明かにしようとしても不可能だ。しかし軍神と仰ぐ中佐の精神をうかがふには十分である。第一そこに着眼しないと動きがとれない。

廣瀨中佐といへば、軍神としての一生を意味するやうに思はれるが、この歌はわ

づかに十數分間の中佐の行動をうたつたものだ。第二にそこに着眼しないと、一擧一動が全人の光であることがわからない。こゝに導くには、挿畫――東京神田須田町にある銅像――の觀察から導けばよい。

ロシヤの南下をおさへようとして、まづ火蓋をきつたのは仁川沖で、露艦二隻を擊沈した。明治三十七年二月九日午後〇時十五分。

第一回の旅順攻擊は二月八日の夜襲、九日午前中の戰鬪。

二月十日宣戰の詔勅下る。

第二回の旅順攻擊は二月十四日午前三時朝霧。午前五時速鳥。敵艦は港內ににげこんで修理をはじめた。

第一回旅順港口閉塞　二月二十四日午前三時半。天津・報國・仁川・武陽・武州丸の五隻。廣瀬中佐は報國丸を指揮す。

第二回旅順港口閉塞　三月二十七日午前三時半。千代・福井・米山・彌彥丸の四隻。廣瀬中佐は福井丸を指揮す。名譽の戰死。

廣瀬中佐名は武夫、明治元年五月二十七日大分縣直入郡竹田村に生る。

杉野兵曹長名は孫七、慶應二年十二月十九日三重縣河藝郡榮村に生る。

第一時には、全文通讀、挿繪の觀察をさせたい。――何の繪か。この銅像の上なるは誰。下なるは誰。中佐の左手に持つてゐるものは何。右手に持つてゐるものは何。(舵機のやうに見える)兵曹長は何をしてゐる。銅像のこの場面は、場所は何所で、いかなる場合か。(旅順の港口で、爆沈の場所を求めてゐる)次にこの歌はどれ程の時間をよんだものであるかを考へさせたい。(閉塞隊は敵に發見された。福井丸は既に水雷をうけて、沈沒間際である。乘組員は既にボートに乘移つてゐる。中佐が福井丸を見限つて、ボートに移つたまでは十數分間か)次に全文を書かせて、主として一番の歌の場面を想像させたい敵が發見して砲火をあびせかくる光景。水雷命中、杉野は死して、船は沈みはじむ。乘員ボートに移りて、杉野一人足らず。暗の中に中佐杉野を求む。――一擧一動はこれ全人の光であることを知らせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、全文書かせて、主として二番の歌の中佐が福井丸を見限るまでの心の動き、三番の歌の中佐の最後と、何所を軍神といふかなどについて考へさせたい。「うらみぞ深き。」は「をしいことをした。」「殘念だ。」といふ

程の意。なほ全文讀み味はうて、中佐の美しい光にふれさせたい。―一死國に報ひ、一死部下を愛するの情美し。

教材

とゞろく砲音、飛來る彈丸。（敵を發見して。）
荒波洗ふデッキの上に、（船は敵の水雷をうけて沈み行く。）
やみをつらぬく中佐の叫。（部下を思ふ軍神の聲。）
「杉野はいづこ、杉野は居ずや。」

船内くまなくたづぬる三度、（なほ見えず。）
呼べど答へず、さがせど見えず、
船は次第に波間に沈み、（一刻の猶豫も難し。）
敵彈いよ〳〵あたりにしげし。
今はとボートにうつれる中佐、（なほ杉野を思ふ。）
飛來る彈丸に忽ちうせて、
旅順港外うらみぞ深き、（中佐の光。全人）
軍神廣瀬と其の名殘れど。

第二十五　胃とからだ　（二時間）

この課は、現代のために書いたやうな比喩談である。科學の教育が進むと、差別觀がつよくなる。口・耳・目・手・足の考がそれである。口は口のはたらき、耳は耳のはたらき、目は目のはたらき、手足は手足それ〴〵のはたらきをすることが、平等であるといふ所に、考が足らぬ。かういふ考の者は不幸だ。科學によつて差別觀がすむと共に、他の何物かによつて、平等觀をすゝめなかつたら、人は教育をうけた事が不幸だ。さういふ人は痩せて、相が險惡になる。顔は何といつても心の看板だ。差別をそのまゝに平等と觀じて暮せば、胃とからだの爭は出來ない。爭へば双方

よわるだけで、少しも益する所がない。尋四の終に近くなつて、この比喩談を取扱ふのは、力がはいる様に感じる。この課を取扱ふには、口・耳・目・手・足の差別觀を、胃の平等觀に進めるのが着眼すべき所で、結局世は相持なりといふに落ちればよい。

第一時には全文通讀、讀み得た所をまとめて考へさせたい。―口・耳・目・手・足は、自分の仕事といふことを知らない。胃は知つてゐるが、口・耳・目・手・足がおのづと悟るのをまつて話した。結局世は相持である等―次に

口耳目手足等。胃に向つて。

耳は食事の知らせを聞いても、聞かないふりをし、
目は食物を見ても、見ないふりをし、
手は食物を口へ入れることを止め、
足は食堂へ行くことを止めました。

耳は鳴り、
目は暗み、
手足はなえてしまつて、動くことが出來ず、

「顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

を書かせて、口・耳・目・手・足の抗議の結果を考へさせたい。なほ抗議の言葉のしどろもどろである事を、形の上からも考へさせたい。心の亂れたものの言葉は、形が整はない。

僕等はふだんいそがしく働いてゐますのに。―叮嚀ないひぶり。
君は唯坐つてゐて物を食ふだけで、少しも僕等の爲につくさない。―喧嘩腰
僕等は一同申し合はせて、今日からは働かないことにしたから、さう思つてくれ給へ。―あくたれ口の感がする。

言葉は心の姿だ。片言雙句も氣をつけなければならない。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に本日の箇所、「此の時胃は一同に向つて言ひました。」から終まで讀ませて、その中の重要部分四箇所を發見させたい。―傍線を施した四箇所―それを書かせて、胃の悠揚せまらずして說く要點をたしかに知らせたい。

私は兵庫縣の江井で、石上校長のこれを取扱ふのを見た。校長は大きな圓をか

いて、からだといひ、中心に中位な圓を書いて、胃だといひ、胃の周圍に梅ばちのやうな圓を五つ書いて、それに口・耳・目・手・足と書きこんだ。この圖解一つで、この課をらく〳〵と取扱つた。私は石上君の圖解を拜借して、何處ででもこの取扱を外したことはない。

教　材

或時、口・耳・目・手・足等が申し合はせて、胃に向つていひますには、

「僕等はふだんいそがしく働いてゐますのに、（それが仕事だ。）君はたゞ坐つてゐて物を食ふだけで、少しも僕等の爲につくさない。（他を見る要はない。）僕等は一同申し合はせて、今日からは働かないことにしたから、さう思つてくれ給へ。」（今の世の人のいひさうなこと。）

といひました。さうしてそれから後は、耳は食事の知らせを聞いても、聞かないふりをし、（多少つらからう。）目は食物を見ても、見ないふりをし、（多少つらからう。）手は食物を口へ入れることを止め、（多少つらからう。）足は食堂へ行くことを止めました（多少つらからう。その任務をかへりみないといふことは。）

かうして二三日たちますと、耳は鳴り、目は暗み、手足はなえてしまつて動くことが出來ず（當然）顏の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。（口耳目手足の禍全身に及ぶ。）此の時胃は一同に向つて言ひました。（わからないものにはわかる時をまたねばならぬ。）

「君等はかうなることは知らなかつたのですか。（愚である。）僕はたゞ坐つてゐて物を食ふだけの者ではありません。食つた物をこなして、之を血の製造場へ送るのが僕の役目であつて、僕が若し食物をこなさなかつたなら、からだを養ふ所の血がどうして出來ませう。（考へてみるがよい。）君等は僕を苦しめようとして、（苦しめて何になるか、たちがわるい。）此の數日の間少しも食物を送つてよこしませんでした。其の爲に新しい血が出來なくなつてかへつて君等は自分で苦しむやうになつたのです。これは全く君等が自分で招いたのであります。（事を好むといふものだ。）今になつて始めて、考違をしてゐたことがお分りになるでせう。君等が若し僕に食物を送る爲に働いたといふなら、僕もまた君等を養ふ爲に骨を折つたといひます。（言ひ分はこちらにもある。）こんなわけですから、これから後は互に親しみ合つて暮

しませう。世の中といふものは、すべて相持のものです。」（差別即平等。）

之を聞いて、手足等一同は、なるほどと感心したといひます。

第二十六　分業（二時間）

分業とは仕事を手分してする事だ。それには一つの物を作るに、手分をしてする技術的分業と、農・工・商・漁のやうな職業的分業と、土地によつて産業を異にするやうな場所的分業がある。この課は例をマッチに取つて、技術的分業を書いたもので、分業の意義、分業の利益、分業に従事する者の心掛が述べてある。これを取扱つては、人々の作業は能率の上から見て工夫すべきこと。したがつて種々なる職業を生ずること。地方的産業を生ずることを知らせて、それ〴〵の職業に全力を注ぐのは、人生に意義深きことを悟らせるが着眼すべき點である。

第一時には全文通讀、讀み得た所をまとめて考へさせたい。―マッチの製造について、分業の意義、分業の利益、分業に従事する者の心がけを書いたもの―次に材木を機械にかけて、軸木をこしらへてゐる者もあり、軸木を火に乾かす者もあり、乾かした軸木の先に藥をつける者もあり、藥をつけた軸木を溫室で乾かす者もあり、乾かしたのをそろへて、マッチの箱に入れる者もあり、箱に入れたのを十づつ集めて、包紙に包む者もある。

分業とは手分をして、別々の仕事をすることである。

を書かせて、分業の意義を考へさせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に

分業で造ると、出來がよい。出來高が多い。

したがつて出來のよいものを安く賣つてもまうかる。

うちはを造るにしても、

時計を造るにしても、皆これによるのである。

家を建てるにしても、―）

を書かせて、分業の利益、分業の他の例を考へさせたい。分業の他の例は、この外にもなほ考へさせたい。餘力あらば各段の大意、―一段はマッチの價の安いがうたがひ、二段は製造方法が問題、第三段は分業の意義、第四段は分業の利益、第五段は分業の他の例、第六段は分業に從事する者の注意すべき事―を考へさせて、世は相持の義を明かにしたい。

教　材

マッチはちよつとした物で、價も安く、一包十箱が十錢ぐらゐで買はれる。しかし之を一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらうか（マッチの價の安いが疑問。）たとひ休まず働いても、一人で一日に一包は造れまい。かりに造れたとしても、それを十錢ぐらゐで賣つてはまうかるまい。まうかるどころか、非常な損になる。それではマッチは、どうして誰が造るのであらう。（それが書業になるのは製造方法による。）マッチの製造所へ行つて見ると、職工が大勢居つて、それ〴〵手分をして働いてゐる。材木を機械にかけて軸木をこしらへてゐる者もあり、軸木を火で乾かす者もあり、乾かした軸木の先に藥をつける者もあり、藥をつけた軸木を溫室で乾かす者もあり、乾かしたのをそろへてマッチの箱に入れる者もあり、箱に入れたのを十づつ集めて包紙に包む者もある。すべてかういふやうに、手分をして別々に仕事をすることを分業といふ。（分業の一例と意義。）

分業で造ると其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、一人々々別々になつて造るのとは比べものにならない。したがつて一包のマッチを十錢ぐらゐで賣つても、さうおうにまうかるのである。（分業の利益。）

分業はマッチの製造ばかりではない。うちはを造るにしても、時計を造るにしても、家を建てるにしても、皆これによるのである。（分業の他の例。）

分業で仕事をする時、誰か一人の手ぎはが惡いと、全體の出來までも惡くなる。やはり世は相持のものである。（分業に從事する者の注意すべき事。）

第二十七　人を招く手紙（二時間）

人は何人にも生れた日がある。これを思ひおこして祝ふのは、色々な意義がある。父母の恩をしのぶのもその一。反省するのもその一。人は何人にも死ぬ日がある。祖父母父母のなくなつた日に、法事を營むのは、追慕、冥福を祈る義に於て美しい。還暦といひ、古稀といひ、喜字といひ、米壽といひ、人には高齢を祝ふ事がある。敬老の義に於てこれも美しい。こゝには誕生日と法事と年賀に人を招く手紙があげてある。これを取扱つては、まづ人を招く手紙の作法を知らせる事に着眼すべきである。

第一時には全文通讀、次に一誕生日、二法事、三年賀の意義について考へさせたい。次に三篇共通の要件、―時日、事柄、まねくことば等―を考へさせ、傍線を施した十二の語句（複線を施した語は、八十八の祝として一句と見る）について、逸すべからざる招待狀の要件を知らせたい。

第二時には全文通讀、招待文作法について復習、次に

ちやうど日曜日ですから、母が私にお友だちをお呼びなさい、おこはでもふかして上げようと申します。お呼びするのは大てい近所の人で、あなたが知つていらつしやる方ばかりです。

まことに御苦勞樣ですが。

お心やすい方にお出でを願つて。

を書かせて、これらの語が招待文中における役目、―要件の外に感じが加はる―を知らせたい。ことに誕生日に人を招く手紙では、

ちやうど日曜日ですから―もし天氣がよかつたら、

母が私にお友だちをお呼びなさい、おこはでもふかして上げようと申します。

―もし天氣がよかつたら

お呼びするのは大てい近所の人で、あなたが知つていらつしやる方ばかりです。―もし天氣がよかつたら

すべて「もし天氣がよかつたら。」につゞいて、少しもをかしくないことを知らせ、それ〴〵その感じのかはる次第を考へさせたい。復習又は綴方の時間に、一の文を

範文として、節句に人をまねく文など考へさせ、二の文を範文として、建築祝に人を招く手紙の代筆などさせてみたい。三の文を範文として、長男の卒業祝に人を招く代筆なども考へさせたい。

教　材

一

來る十六日は私の誕生日で、ちやうど日曜日ですから、母が私に、お友だちをお呼びなさい、おこはでもふかして上げようと申します。お呼びするのは大てい近所の人で、あなたが知つていらつしやる方ばかりです。もし天氣がよかつたら、三郎さんを連れて、お晝前にいらつしやい。面白いことをして遊びませう。

三月十二日　　春子

松子様

二

來る二十五日に、亡母の三回忌の法事を致します。まことに御苦勞樣ですが、どうか同日午前十時頃までに、お出でを願ひたうございます。

三月十二日　　廣澤連太郎

杉本佐平太樣

三

父が今年八十八になりましたので、來る二十五日に、お心やすい方にお出でを願つて、ほんの心ばかりの祝を致したいと存じます。同日午前十一時までにどうぞ御來車を願ひます。又まことに申しかねますが、當日祝の歌を一首いたゞきたうございます。これは年よりからのお願でございます。

三月十二日　　小野田國男

澤　勝五郎樣

第二十八　乃木大將の幼年時代（三時間）

大正元年九月十三日午後八時、明治天皇陛下の御轜車が宮城を御發引遊ばさる時、陸軍大將乃木希典閣下は、赤坂新坂町のお邸に於て割腹、殉死を遂げられた。—その夫人も共に—大將は日露戰爭には、第三軍の司令官として、難攻不落の旅順にむかひ、惡戰苦鬪三十八年一月二日つひに開城せしめて、偉功をお立てになつた方である。

乃木將軍の父は乃木十郎希次といひ、きはめて嚴格な武士。

母は常陸土浦の城主土屋相摸守の家來長谷川某の娘壽子これ亦嚴格、主君は長府の城主毛利左京亮元周公。

大將は主君の御上屋敷、今の麻布區材木町五十四番地の御長屋で、嘉永二年十一月十一日に誕生。

偉大な乃木大將のその幼年時代を學ぶのは、同じ年頃の學童をして、自己を顧させるにはよい機會を與へるものである。ことに大將が幼時虛弱で臆病であつたなどは、修養によつて、自己を育てる義を會得させるには、最もよい資料である。この課を取扱つて、見落してはならないことは、乃木大將を育てたのは嚴格な父と母であるけれども、育つたのは乃木大將であることだ。育てた力は、父と母から加へられたとしても、育つた力は、乃木大將にあることを忘れてはならぬ。往復壹里餘の泉岳寺詣でも、冬の水行水も、さらひな食物を食ひなれるまで食べさせられたのも、總べて父と母の慈悲であるが、それを慈悲として有難くうけいれた大將の態度を見落してはならぬ。私は父母の苦心を、なつかしい心でうけとつた大將をえらいと思ふ。この一點をおろそかにして、この課を取扱つたら、西洋思想にかぶれた今の人々には、全文が浮いて、落着を失つてしまふと思ふ。古來旃檀は双葉よりかんばしといひ、實のなる木は花から知れるなどいふは、その態度をさしていふのである。

第一時には全文通讀、讀み得た所をまとめて考へさせたい。乃木大將は人の口の齒にかゝるほど弱く臆病だつた。父は我が子を弱くしか育て得ないやうでは、若君のお守役として申譯がないと考へる程まじめな人だつた。泉岳寺詣、水行水、

食物のことなど、強く育てる手段であつた。家は貧しくても、武士道にかゞやく教育をしたことなど―次に第一段のうち、

寒いといつては泣き、
暑いといつては泣き、（たので、近所の人は大將のことを（無人ではない、泣人だ。）と）
朝晩よく泣い

いつたといふことである。

と第二段全文を書かせて、「藩主に對しても申しわけがない。」といふ理由を明かにしたい。こゝはほんたうに眞面目な考である。

第二時には全文通讀、第一時の復習、第三段第四段第五段の中に、傍線を施した十の語句を書かせ、父母の苦心を知らせると共に、大將が一生の間「寒い」とも「暑い」ともいはなかつた心中をよく〳〵考へさせたい。「寒い」といつて、寒さの去るものでもない。「暑い」といつて、暑さの除かれるものでもない。「寒い」時には寒さと共に、「暑い」時には暑さと共にと考ふべきである。これが最も有效な避暑避寒の方法だといふ。大將はをさないながら、それを悟られたのであらう。決して父の水行水をおそれてではあるまい。父母のお心盡しをそのまゝにうけ得た大將の態度を明かに知らせたい。

第三時には全文通讀、第二時の復習、第六段第七段第八段のうち、傍線を施した十の語句を書かせ、父母の心盡しの效果のあらはれて、東海道の踏破に成功せられたこと、郷里にあつては貧しき中にも武士的の精神教育をうけられたことを說きたい。父母の慈悲と自分の力で、忠誠質素、眞に武士の手本として自己を育てられたことを知らせたい。

教　材

乃木大將は幼少の時、體が弱く、其の上臆病であつた。（育てれば育つ。）幼名を無人といつたが、寒いといつては泣き、暑いといつては泣き、朝晩よく泣いたので、近所の人は大將のことを、無人ではない、泣人だといつたといふことである。（人の口の齒にかゝるほど弱かつた。）大將の父は長府藩主に仕へて、江戸で若君のお守役をしてゐたが、（嚴格な方。）自分の子がかう弱虫の泣虫では、第一藩主に對しても申しわけがない、（武士らしいかんがへ。）どう

かして大將の體を丈夫にし、氣を強くしなければならぬと思つた。（若君をといふ前にまづ我が子を。）そこで大將が四五歳の時から、大將の父はうす暗い中に大將を起して、往復一里餘もある高輪の泉岳寺へよく連れて行つた。（三つ児のたましゐ百まで。）泉岳寺には名高い四十七士の墓がある。（日本武士の花。）大將の父は途々義士のことを大將に話してきかせて、其の墓に參詣したのである。

或年の冬、大將が思はず「寒い。」といつた。すると大將の父は

「よし。寒いなら、暖くなるやうにしてやる。」

といつて、大將を井戸端へ連れて行つて、着物をぬがせて、頭から冷水を浴びせかけた。（この教訓骨身にこたへた。）大將はこれから後、一生の間「寒い。」とも「暑い。」ともいはなかつたといふ。（父をおそれてではあるまい。寒暑に慣して生きる道を悟つてであらう。）

大將の母もまたえらい人であつた。大將が何か食物の中にきらひな物があると見れば、三度三度の食事に、必ず其のきらひな物ばかり出して、大將が馴れるまで、うち中の者がそればかり食べるやうにした。（母の慈悲。）其の爲、大將には全く食物に好ききらひといふものがないやうになつた。（強い力。）（ならはしは）

大將が十歳の年、大將の一家は郷里へ歸ることになつた。其の時大將は江戸から大阪まで、馬やかごに乘らず、兩親と共に歩いて行つた。（健脚。）當時大將の體は、もうこれだけ丈夫になつてゐたのである。（父母が教育の力。自ら育てた力。）實に鐵は熱いうちにきたへなければならぬ。

郷里の家は六疊・三疊・二疊の三間と、二疊の板の間が一つだけの、至つてせまい、そまつな家であつた。（今も長府にある。）けれども刀・槍・薙刀など、武士の魂と呼ばれる物は、何時もきら〳〵光つてゐたといふことである。（貧しくて、道のかどやく家は子を育てるに最もよき家庭。）

此の父母の下に、此の家に育つた乃木大將が、終生忠誠質素でおし通して、武人の手本と仰がれるやうになつたのは、まことにいはれのあることである。（育てる力。育つ力。）

昭和三年の春季教壇行脚に出た。東京をたつたのが五月二十一日、宮城縣の鳴瀬・岩出山、山形縣の温海・廣瀬を經て、北海道の小樽に來た。こゝには大正十五年の春、三週間足をとゞめた緑小學校がある。引きつけられるやうな思ひで訪うた。職員諸氏及び多數の兒童から歡迎された。私は己を忘れて一週間壇上にたつた。二年以前に比して、學習態度の著しくよくなつてゐるのに驚いた。尋二に五一ぢいさん、尋三に雨、尋四に一太郎やあい、尋五に水師營の會見、尋六に無言の行を取扱つた。態度のよい兒童、着眼のたしかな兒童に、かうした教材を取扱ふのは無上にうれしかつた。その暇々を盗んでこの書の校正を終つた。これもまたいそがしい中に面白かつた。共に私としては尊い思出の種である。餘白のあるまゝに、之を書きつけておくことゝした。（昭和三年六月十一日午後五時余市へたゝうとする前一時間）

昭和三年六月廿八日印刷
昭和三年七月廿日發行

不許複製

定價壹圓參拾錢

著作者　芦田惠之助
東京市小石川區大塚仲町三六
發行者　芦田共介
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷者　根本力三

發行所　東京市小石川區大塚仲町三六
振替東京六一六八一、電長大塚二〇三二　蘆田書店

取次所　東京六合館　大阪柳原書店

（東京秀英舍印刷）

318
393

芦田恵之助著

國語讀本 **各課取扱の着眼點** 全六冊

既刊
尋常科第一學年
尋常科第二學年 (定價各壹圓貳拾錢 送料各八錢)
尋常科第三學年
尋常科第四學年 (定價各壹圓參拾錢 送料八錢)

◎二年有餘の教壇行脚によつて得たる、讀方教授に關する經驗の記錄である。
◎取扱の着眼點が明かならずして、教壇に立つは可なり不快なものだ。
◎それから來る教授の破綻は、他に訴ふべき道がない。隨分苦しい事だ。
◎着眼點について、私の苦んだ跡はこの著だ。同好の士の微笑する所もあらう。
◎この著は着眼點研究の原案だ。原案なくしては決議錄は出て來ない。

芦田惠之助著

第二 **讀み方教授**
定價貳圓六拾錢 送料拾貳錢

□朝鮮南洋の國語讀本を編纂して歸つての著。
□教材の選擇取扱の着眼について詳說したのが特色。

尋常小學 **國語小讀本** 全十二冊

既刊 卷一、卷二、三、四、各四拾錢 卷五、六、七、八各四拾五錢 卷九、十各五拾錢
續刊 卷十一、卷十二、各五拾錢

□家庭に於ける兒童の讀本。
□學校の補充材料として好適。
□母に讀んでほしい讀本。

青年訓練所讀本 **國語の力** 全四冊
定價各參拾錢 送料四錢

□所々の訓練所に採用の榮を得て盛に育ちつゝある讀本。

終